50
4223

324-203

文學士田中義能著

神道本義

明治
43.10.6
内交

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ敎育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益〻國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益〻更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑〻我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

序言

一　本書は著者が數年前より、各地の招請に應じ、「神道の本義」に關して講演せるものを集めたものであります。

二　が、併し單に講演集と云ふが如くに集錄しないで、前言や何かを創り、種々組織を變更し、可及的に秩序を立て、意味の足らざるを補ひ、重複せるを除き、以つて一の書としたのであります

三　從つて全體を通じ、本書は著者の神道に對する信念を前後左右より述べたものであります。著者の確信を披瀝したものであります。

四　本書を梓に上ぼしますにつき、著者は著者の菲才、加ふるに學窓多忙。從つて、深く精練の勞を致すこと出來なくして、或は重複し、或は前後の聯絡を缺き、その他種々の缺點の存するのを恐るゝのであります。けれども現下神道勃興の氣運に際し、此の種の著書の甚だ乏しきに顧み、聊か學界に貢獻するを得ば、多大の幸なりと思ひ、敢へて之れを公にすること〻致した次第であります

五　でありますから、思想の疎漏、魯魚の誤など種々の缺點は切に讀者諸君の寛容を請ふ次第であります。

明治四十三年九月十八日

東京において

著者識

神道本義

目次

第一章　神道勃興の氣運……一—六
一　戰爭と文明……一
二　西洋人の神道研究……三
三　國內に於ける神道の勃興……四
四　神道家の任務……五
第二章　神道研究上の謬見……六—二〇
五　無茶苦茶の研究……六
六　國學の興隆……六
七　二翁の學說の比較……八

八　一致點……一〇
九　反對點……一一
十　祖徠と仁齋……一三
十一　神道の本質……一三
十二　時代精神に反抗す……一五
十三　神道の基礎學……一八
十四　神道の堂奥……二〇

第三章　神道の意義……二一—二六

十五　國民神道を解せず……二一
十六　學者亦神道を解せず……二三
十七　管見……二四
十八　神道と道德……二六

十九　神道と宗教……二七
二十　神道と政治……二七
二十一　神道の意義……二八
二十二　神道と我が國民的精神……三二

第四章　上古の神道……三六—四八

二十三　神道の變遷……三六
二十四　上代の日本國民……三七
二十五　儒教の影響……三九
二十六　佛教の影響……三九
二十七　朝廷の態度……四一
二十八　國民の煩悶……四三
二十九　神佛習合……四五

第五章　中古の神道……四八—七一

三十　山王一實神道……四八
三十一　兩部習合神道……五六
三十二　唯一神道……六一
三十三　親房卿の神道……六五
三十四　兼良卿の神道……六九

第六章　近世の神道……七二—九三

三十五　吉川流の神道……七二
三十六　社家神道……七三
三十七　垂加神道……七八
三十八　水戸流の神道……八〇
三十九　古學神道の勃興……八一
四十　神道の正しき研究……八八

第七章　神道の性質……九三—一二八

四十一　師に讓らず……九三
四十二　神道に對する異論……九六
四十三　吾人の主張……一〇一
四十四　神道の典據……一〇三
四十五　神道に於ける三方面の説明……一〇六
四十六　外教の利用……一一三
四十七　神道の本質……一二六

第八章　帝國の大道……一二八—一六一

四十八　神道は帝國の大道……一二八
四十九　神道の説明……一二九

五十　神の觀念……二九
五十一　神の道……三三
五十二　神道の要旨……四六
五十三　敎育勅語……五三
五十四　我が國民の天職……五六
第九章　神道の本義……六二—九八
五十五　要約……六二
五十六　一世の誤解……六九
五十七　敎育勅語の斯道……七五
五十八　戊申詔書……八五
五十九　結論……九五

神道本義目次終

神道本義

文學士　田中義能著

第一章　神道勃興の氣運

一　戰爭と文明

戰爭は急速に文明を發達せしむと、大ナポレオンが云つたと云ふことでありますが、成程さう思れます。勿論負けた方からは一樣にさうとも云はれますまいが、人間社會の大局から申しますれば、此の言は如何にも思ひ當ることが多いのであります。吾々の熟知して居る我が國の歷史に見ましても、關ヶ原の役は急速に江戸時代の文明を作り出し、戊辰の役は急速に維

新の文明を作り出し、日清の役は我が文明を急速に發達せしめて東洋の強國たらしめ、日露の役は更に急速に之れを發達せしめて、世界の強國たらしむるに至つたのであります。コー云ふ風に此の最近二大戰役によりて、我が國の文明は急速に發達して參つたのであります。所で關ヶ原の役とか、戊辰の役とか申す戰爭は、高が國内の戰爭で、規模も小さく、且つ當時交通機關も十分に發達しませんでしたから、世界の注意も格別惹きませんでしたが、最近の二大戰役は、對手は外國、戰爭は從來殆んどその比を見ざる大規模、交通機關はいやが上にも發達し、さうして我が國が連戰連勝、丸で強いことの底が知れないとも云ひたい位な有樣でありましたから、非常に世界の注意を惹きました。のみならず之れによつて日本の文明は急速に發達して參つたもので、西洋人などは、唯、注意したばかりでは滿足できない。氣持もわるい。そこで色々と彼れ等の謂ふ所の此の小さい神秘な國を研究し出したのであります。

二　西洋人の神道研究

それで先づ彼れ等は此の小さい國が、大國を對手にして度々大勝利を得る原因を研究しやうと思つて非常に頭を苦しめたらしいのであります。さう云ふ彼等の研究の結果としてどうしても日本人の間に教育が十分に普及して居る結果であらうといふ事を考へたらしい。けれ共其の教育といふものは、唯、普通西洋などに行はれて居る教育とは少し違つた一種特色の有る教育、即ち一種特別の精神的の教育といふ者が其の間に行はれて居ると云ふ事を、彼れ等の炯眼なる直に看破したのであります。其の精神的の特色といふは何う云ふ處であらうかと云へば、則ち我々が言ふ所の日本魂と云ふものゝ教育であると云ふことは直ぐ西洋人に分る。此の日本魂といふものゝ教育、即ち一種特別の精神教育の結果、斯う云ふ効果を奏したのであると。斯くなつて來ますと、勢ひ日本魂とは何う云ふものかと云ふ

研究に溯つて來る。日本魂の研究になつて來ますといふと遂にそれが神道の研究と云ふ事に導かれて行くのであります。さう云ふ譯であります、から、今日西洋人の間に段々神道の研究、日本に於ける神道の研究といふものが盛になつて來たのであります。

三　國内に於ける神道の勃興

外人の間にかう云ふ傾向が有るばかりで無い。日本人自身の間にも大いに茲に氣が附いて來た。今まで殆んど考へずに居た所の神道といふものに對して餘程考が及んで來た。學者の間に於きましても、一向今まで神道を研究すると云ふ樣な事は見受けない位でありましたが、近來は神道研究會とか、神道談話會と云ふやうな會などもアッチコッチに出來て來るし、色々な方面から神道を研究しやうといふことが盛になつて來たのであります。又、當局者に於きましても、神社中心說とか或は神官養成とかいふ風な事に大變注意を傾けられて來たことは、讀者諸君の日々の新聞紙上で御承知のことゝ思ひます。今までは餘り此の方面に注意を拂はれなかつたのが非常に近來此の方面に注意を拂はれて來た。從つて今まで神官神職と云ふ者は餘り眼中に置かれなかつたのが、近時是れは大變大事な役前を持つて居るものである。總べて地方に於ける事業の中心に、神官神職はならなくてはならぬと云ふことも唱へられて來るやうになつて來ました。斯う云ふ風になつて來たといふのは、外人からの影響もありませうが、詰り、日清日露の二大戰役の結果、文明の進歩して來たと同時に、歐米崇拜の夢覺めて、自覺心と云ふものが非常に强くなつて來つた爲であります。

四　神道家の任務

こゝ云ふ次第で今や、神道興隆の氣運に向つて來たのであります。神道家たるもの須らく先づ起つて大いに神道を研究し、能くその根本義を體得

し、我が國民をして皆此の固有の大道を體得せしめ、以つて皇運を千載に扶翼し、國威を萬代に發展せしめなくてはならないと信ずるのであります。

第二章　神道研究上の謬見

五　無茶苦茶の研究

所が從來の國學者又は神道研究者中には、先づ神道の意義を明にしないで、無茶苦茶に之れを研究しやうとして居る學者も少くない樣であります。コー云ふ學者は徒らに古人の研究範圍に齷齪し、舊風を墨守し、自ら狹くし、種々の謬見誤解に陷る傾がありますので實に慨歎に堪へない次第で御座います。

六　國學の興隆

茲で私は少しく昔に溯つて考へて見やうと思ふのであります。在昔、慶長、元和の頃に德川家康が、一たび天下を一統しましてからと云ふものは、從來の戰國的、沒趣味的生活の反動として、學術文藝は、翻然茲に勃興して參つたのであります。

我が國學界に於きまして、かゝる氣運は殊に著しく認むることが出來るのであります。かの下河邊長流、契沖、阿闍梨などが、當時、國語、國文を研究せるに當りましては、時代は勿論、彼れ等自らも、國學の興隆、斯の如きに至るならんとは、殆んど夢想しなかつたらうと思はるゝのであります。然るに氣運の熟する所、彼れ等の殁して後、百年ならざるに、賀茂本居二翁、相尋いで出で、之れを承くるに平田篤胤翁を以つてして、我が國語、國文の學は、大いに發達し、遂に所謂國學なるものを成し、多くの學中、最も高尚なるものゝ一となるに至りました。殊に本居、平田二翁の如きは、我が國學界、我が神道界に於いて、實に空古の偉觀を極めた次第であります。我が國學、我が神道の

今日ある、全く此の二翁の賜と云ふも、決して過言でないのであります。で、これから聊か此の二翁の學說を比較して神道研究上の謬見を正したいと思ふのであります。

七　二翁の學說の比較

讀者諸君の御承知の通り、平田翁は、本居翁の門人であります。併し其の門人たることは、本居翁の賀茂翁に於けるが如く、直接教を請はれたるにあらずして、實に歿後の門人と云ふのであります。已に歿後の門人でありますけれども、歿後にすら門人となるゝ位でありますから、平田翁が本居翁を尊崇し、之れに敬服せられて居られたことは、並一通りではありません。

篤胤翁の著『入學問答』には何と書てありますか。「此の翁の學問の太じき事は實に生民有りてより以來比類これなく候。但しかやう申候はゝ、師に心醉の餘り、稱過き候やうに、思召さるべく候へども、是は天下の公論に御座候事、唯今申までもなく、其著はし置かれ候書どもを熟讀せられ候はゝ篤胤が過言ならぬ事を察せらるる可候」とあるでは有ませんか。又、『靈能眞柱』には「吾師の老翁は、萬國に一人と坐す、學びの大人におはす。」と云ひ、時間的には、生民ありて比類なしと云はれ、空間的には萬國に一人と云はれて居られるではありませんか。其の尊崇敬服知るべきであります。尙、『古道大意』には「この翁の學問の太じきことは、世に類なく、それは其著されたる書どもを讀明らむれば、能く知れることで申すまでも無けれども、その始は漢の學問を深く學ばれて、夫れより御國の學びに移り、縣居の大人に從て、その大志を受繼がれ、學問の道に於ては、古より類なき大功を立てられたで御座る。」と御座います。此れ等の言によりて、如何に平田翁が本居翁を尊崇敬服せられしか、殆んど吾々の豫想の外であると云ふことが明であります。されど論語には、仁に當りては師に讓らずとあるが如く、平田翁も、事、道の問題に關しては、全く本居翁に服せず、大いに本居翁の說を駁せられたることもあり

たるは、又、吾々の意外に感ずる所で、之れが平田翁の平田翁たる所以だと思ふのであります。

さう云ふ次第で、此の二大家には、種々學説に異同を生じたのであります。で、私は之れより其の重なるものを二三擧げて見やうと思ひます。

八　一致點

古典の劈頭は何れも天地の太初を以つて始つて居るものでありますから、昔より神道を説きますものは、多少皆此の問題に接觸しないものはないやうでありますが、併しまだ十分に研究せられなかつたのであります。所が本居平田二翁は、之れに就いて種々の研究をなし、天地未だ生らざりし時に浮漂の如きものありて、遂に一部分は登り天となり、一部分は降り地となるとし、之れは産靈神の御德によるものにして、二神は實に天地を造りましたものとせるのであります。此の點が二家の相一致する所であります。

次に、本居翁は、生れ乍らの眞心ぞ道にはありけると『玉勝間』に於いて申し、平田翁も亦道を以つて産靈神の御賦へなされたる性に基くものとして居らるゝのであります。此の點に於いて、二大家の學説は、復一致して居るのであります。

九　反對點

之れと反對に、其の異る所の大なるものは、天と黄泉との説であります。本居翁は、「天は虚空の上にありて、天神だちの坐します御國なり」と云ひ、此の大地と二重になりて、大虚の上に存在するものと信じ、而して太陽を以つて、天照大御神と信じ、徹頭徹尾之れを主張せられたのであります。然るに平田翁は、太陽を天とし、高天原とし、天照大御神は、太陽の主宰神とせられたのであります。

次に平田翁は、本居翁が、人死すれば、黄泉に行くものなりとせられたるに

反し、『靈能眞柱』に於いて、師の翁の人は死ぬれば、その魂は、善きも惡きも、皆黄泉國に往くといはれし說の、いかに非說ならじやは、と云はれて居ります。

是れ、元來、平田翁が、本居翁のヨミ即ち地下の國とせるに反し、ヨミ即ち月球となせるの結果、人の死すれば幽冥に至るものとせられたるの自然の結論なのであります。

而して所謂幽冥なるものは、平田翁の說によれば、此の世界の無視界的方面であります。故に篤胤翁は幽冥の政府、即ち冥府に就いて、『幽顯辨』に於いて云はれますには、抑も冥府と云は、此顯國の外に、別に一處さる名の國地あるにあらず。直にこの顯國內に何處にまれ審廷を設けて、上件の幽事を糺斷り政ごち給ふ所を云ふ言なるが、その本府はと云はゞ出雲大社ぞ本なりける」と云はれてあります。

本居翁と平田翁の間に此の如く學說に相違を來たしたのは、如何なる理由でありませうか。

十　徂徠と仁齋

荻生徂徠は、伊藤仁齋の後に出で、均しく古學を主張しながら、仁齋に反對して古文辭の研究の必要を主張し、仁齋が道は自然に出づと云へるを排斥し、作爲に出づとなし、道は仁義なりとせるを排斥し、禮樂なりとし、種々異說を唱へました所以と申すものは徂徠と仁齋、學統の關係、毫も存するなく、徂徠は別に一家を成さんとしたが故であります。

然るに、篤胤翁の宣長翁に於ける、其の關係は、徂徠の仁齋に於けるが如くならずして殆んど東涯の仁齋に於けるの觀があるのであります。之れにも係はらず、東涯の如く、終始、師の說を紹述せられない斗りではなく、かゝる反對說をも敢へて唱へられたのであります。此の點は吾々の深く考究するを要する所で御座います。

十一　神道の本質

元來神道は事實の道で、教の道ではないのであります。教の道は教を錄したる經典の外に出づるの餘地がないのでありますが、事實の道は、事實を解するに進歩的であります。其の時代々々の知識を以つて之れを解することが出來るのであります。かの基督教の如く教權内に全く束縛せらるゝものとは、同日に論ずべきものでないのであります。だからして、平田翁は、神道の大精神を體し、而して神道の道を說かるゝに、能く時代精神、時代知識を呑み込んで之れを說かれたのであります。神道を說くにはドーシテモかうなくてはならないのであります。平田翁が本居翁に對して、あのやうに異說を唱へながらも、尙忠實なる本居翁の門人たる所以は此の故であります。荷田翁は、昔て、學びの道は、天が下の大道なれば、己れひとり、立たらむが如く、ほこるべからず。學ぶ人も師の教なりとて、あながちに泥むべからずと申されて居ります。此の思想は眞淵賀茂翁に傳へられ、以つて本居平田兩翁に傳へられたのであります。神道の研究には常にかゝる注意が肝心であります。然るに從來の國學者又は神道研究者の中には本居翁とか平田翁とかある一大家を以つて師とし、その大家の言を金科玉條とし、その書を基督教の聖書の如くに心得、一言一句墨守して違背せんことを是れ恐ると云ふ態度に出で、人ありて聊かにてもその說に反せんか直に呼ぶに異端邪說を以つてする風がありましたやうであります。之れを私は神道研究上の一の謬見と思ふのであります。論より證據。以上述べて來ました諸大人の言行を御覽なるがよいと思ひます。神道を研究せらる御方は此の點に深く注意をせられなくてはならないのであります。吾々は平田翁が本居翁の學說を改善せしと同一の精神を以つて、今後神道を研究し、二十世紀の文明に最も適切なるものとしなければならないのであります。

十二　時代精神に反抗す

私はをこがましいやうでありますが、今一つ神道研究上の謬見を論じて

見たいのであります。

大隈伯は嘗て教育家大會席上に於いて、今日、時代精神に反抗するものは、神道家と漢字なりと絶叫せられました。放言も亦甚しいではありませんか。が、併し、私は此の放言が或は眞理ならずやと感れざるを得ないのであります。

試に眼を放つて御覽なさい。方今、世の國學を學び、神道を研究しますもの、或は『古事記』とか、或は『萬葉集』とか古典の文字の意義の說明、古書の言語の解釋或は所謂、歌よみ、文かく學びに、五十年の生命を捧げて顧みないものに乏しくないではありませんか。國學の精神を喪ひ、神道の本義を沒して居る、亦甚しいではありませんか。かゝる人々に對しては、大隈伯の言、實に頂門の一針と云ふべきであります。本居翁は何と云はれて居りますか。先づ人として人の道は、如何なるものぞと云ふことを知らでであるべき限りにあらず。學問の志なきものは、論の限りにあらず。かりそめにも、其の志あらんものは、同じくは道の爲に力を用ふべき事なり。然るに道のことを等閑にさし置て、唯、末の事にのみかゝづらひをらんは、學問の本意にあらずと『うひ山ぶみ』に申されて、言語文字にのみに勢力を盡し、或は詩文のみに拘泥して居るものを攻擊せられて居るではありませんか。實際、言語や、詩文や、歌文の如き、純文學のみを以つて、あたら一生を終るは、憐むべき次第と思はれます。さりとて、私は、篤胤翁が、

ますら雄の爲すべき業を知らで有や手弱女もなす歌作みはなぞ

と高吟し、歌文を以つて、流行歌、豐後節に比せるが如き、極端なる說には、贊成しません。人間ですもの、理性を備へて居ると同時に感情も備へて居ります。道を研究すると同時に歌文を樂むも、亦極めて必要の事と信じます。

そればかりでなく、神道の研究、國學の精神の研究には、歌文は勿論一般に國語、國文の研究が大いに必要であります。私が平田翁の絕對的之れが排斥に贊成しないのは、此の必要を認めて居るからであります。が、能く誤解

ないことを願います。私は國語國文は、國學の神髄、神道の研究の基礎として必要を主張するのであります。つまり、國語、國文は之れが研究の普通學なのであります。

十三　神道の基礎學

一體、醫學、工學、法律學、經濟學の如きを研究するには、皆、普通學が基礎となるのであります。我が高尚なる、我が神聖なる神の道を研究し、國學――國語ではありません――國學の眞髄を得んとしまするには、世間一般の普通學の上に、國語、國文の普通學を必要とするのであります。國語、國文は實に之れが基礎となるものであります。荷田翁は何と申されましたか。古語通せざれば則ち古義が明にならない。古義が明ならざれば古學が復さない。先王の風迹を拂ひ、前賢の意荒むに近いと云はれたではありませんか。つまり、國語、國文の研究は祖宗の遺風前賢の遺訓を知るの階梯であります。

ですからして、若し世に、切角國學を學ばんとして、國語、國文を研究し、而して道の研究を等閑に附するものがありましたならば、普通學のみを修めて、專門學を修めざるもので、地ならしをしたのみで、家を建てないのと一樣、殆んど勞して功なしと云ふ次第であります。此の如きは識者の取るべき所でありませうか。

今や、神道勃興の氣運大いに熟しまして、神道家以外の人も色々と之れを研究して居ります時代に、國學者又は神道專門の研究者が、此の神道研究上の一大謬見に座して、方便たる國語、國文にのみ拘々爲として居つて宜しいでありませうか。現に西洋人でさへ、頻りに熱心に我が神道を研究して居る時代ではありませんか。苟くも、國語、國文を研究して居らるゝ諸君は更に大いに進んで、神の道を研究し、國學の眞髄を得、我が國固有の思想を闡明せられなくてはなりません。

『徒然草』に一話があります。

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水をがまざりければ、心憂くおはえて、或時思ひ立ちて、たゞ一人かちよりまうでけり。極樂寺、高良などを、をがみて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人にあひて、年頃、思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人毎に、山へのぼりしは、何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ずとぞいひける。

と。

十四　神道の堂奥

世の神道を研究せらるゝ諸君、國語、國文を研究して、國學、神道の堂奥に上られざるものは、此の一話の主人公と選ぶ所ないではありませんか。然り神道を研究せらるゝ諸君、願くは更に大いに發憤して、深く堂奥に上らるゝの覺悟を有せられんことを。

第三章　神道の意義

十五　國民神道を解せず

已に神道勃興の氣運に向つて來たのでありますが、併し神道とは何う云ふものであるかと、斯う云ふ問題を出して見ますと、此の日本人自身の間にその解答が大變不明瞭であります。其の考が極めて不明確であります。日外も國學院大學を卒業した人が私の處で話しますのに、自分が、友達の相當の知識を具へて居る人に向つて、自分は將來神道家にならうと云ふ事を言ふと、其の人などはそれぢや僕が死んだら神葬にするのだからどうかマア成る可く宜しく頼むなんと云ふ樣な事を云つて居たと云ふ話です。さう云ふ樣な工合で神道家といふ者は神葬の時に祭詞を讀んだりする人、アゝ云ふものが神道家で、アゝ云ふことをするのが神道だといふ考が、而かも相當の教育を受けた人の頭の中にある。それ處では無い、ズッと最高の教

育を受けた人でも、此の神道といふものは何う云ふものであるかといふと、非常に考がボンヤリして居る。でありますから諸君も御聞きになつたでありませう。留學生が西洋などへ行くと往々西洋人が日本に神道なるものが有るさうだが何う云ふ教かといふことを聞く。留學生と申せば大抵全國の俊秀の方に屬する學生である。さう云ふ人に向つて聞きますと、さう云ふ人は殆んど答が出來ないといふ事である。出來た處が、西洋人をして成程と言つて首肯せしむる樣な答はまづ出來ないのである。是れはどう云ふ譯だ。日本人自身の間に神道といふものゝ考が一向ボンヤリして不明確である。近來神道の研究といふものが非常に勃興したにも拘らず一般國民の間に神道に對する考は極めて不明確であるからであります。それには勿論原因が有るだらうと思はれます。

先づ我々日本人、日本國民は日々神道を行つて居りながら、その考が此の如く不明確であるのは、詰り我々が平常米の御飯を食べて居りながら、御飯の味といふことを些とも知らぬ。隨分うまいものであるのに、唯、夢中で食べて居るのと同じ譯で。我々は知らず識らずの間に、毎日神道を實行して居るので一向それに注意が向いて來ないのであらうと思ふ。が、そればかりでは無い。他にも原因があります。

十六　學者亦神道を解せず

それは何う云ふものかと申すと、神道といふ事の考が一般の人に不明確であるばかりでは無い。學者の間にも不明確である。前にも申しました通り、神道の學者それ自身の間にも不明確であるのであります。で、今日でも頻りと神道は政治の道であるとか、或は神道は一種の宗教だとか、イヤ神道は一種の道德である、德教であるとか。斯う云ふ風な事を學者の間に盛んに唱へて居ります。此の如く學者の間にすらも神道に對する考が明確で無いのですから、一般の人の間にその考が明確で無いと云ふ事は怪む

に足らない譯であります。マアこう云ふ次第であります。ですから今日普通の人に向つて神道といふものは何う云ふものであるかと聞きますと、さう云ふ人は大抵答へる。神道といふものは神樣の前へ行つて手を拍つて拜むのである。或は神道といふものは笏を把つて、玉串を持つて、神樣の前を往つたり來たりするものである。或は又神道といふものは鈴を振つて、神樣の前に頭を低げるものである。神葬の式を行ふものである。斯う云ふ風の答である。さう云ふ工合に神道を一般の人が多く見て居る。勿論さう云ふ事も慥に神道の中に包含されて居ります。けれ共それを以つて直に神道だと言ふのは非常な間違ひであるのです。

十七　管見

私は斯う云ふ樣な事に就きまして、神道とは何う云ふものかと云ふ問題が起りますと、何時でも度會延佳と申す學者の神道に對する考を以つて答へるのであります。非常に此の人の考が宜いのであります。それは何う云ふ風に言つて居るかといふと斯う云ふのです。玉串を持つたり、神語を唱へたりする事は、詰り、祭庭などの儀式である。宗教的の一つの儀式である。是れ亦神道の一事にして最も重しとする所である。左れど此の事ばかりを神道と思ふは、此の蒼々たる天を管の中から覗いて見るやうなものだ。勿論管の中から覗いて見た所の天も天で無いのでは無い。矢張り天ではあるけれ共、そればかりでは餘りに狹い。所謂管見です。一體神道といふものは、人々日常の間に在つて一事として神道で無いものは無い。であるから君が神道を以つて下に臨み玉ふ時は其の君は仁君である。臣が神道を以つて君に仕へまつる時は其の臣は忠臣である。父が神道を以つて子を養ひます時は其の父は慈父である。子が神道を以つて父母に事へます時は、其の子は孝子である。夫婦、兄弟朋友の間も神道を以つて交り、その他飲食するにも神道があり、手を舉ぐるにも足を舉ぐるにも神道が無い

と云ふ事は無い。斯う云ふ考である。此の度會延佳と申す學者は伊勢の外宮の神官でありまして、近世の劈頭に於ける一大神道家であります。此の人の說を以つて見ても神道といふものは、そんな政治や宗教や道德や一方に限られたもので無いと言ふ事は明かであらうと思ふ。詰り神道が政治の道である。宗教である。德教である。斯う云ふ風に申すのは、管見であります。

十八　神道と道德

之れを事實に徵して見ましても、神道と申しますものは、我が國民日常の行爲に於いて非常に影響を及ぼした所の儒教、その儒教が傳來しない前の道德であつたのであります。儒教が這入つて來ない前にチャンと道德は存在して居つたのです。儒教の道德が這入つて來ない前は日本は丸で野蠻未開で言ふに堪へない不道德きはまる國民だといふ風に、昔の儒者の中に考へて居た人もありましたけれども、決してさうでは無い。儒教の傳はつて來る以前に既に道德は盛んに行はれて居る。其の道德は何であるか、即ち神道である。であるから其の方面から言へば神道と云ふものは道德だといふ事が言へる。

十九　神道と宗教

又神道といふものは我が邦の信仰界、宗教界を風靡しました佛教が傳はつて來ます前に、既に此の日本國民をして安心立命さして居つた所のものであります。左すれば詰り神道は佛教の傳はつて來る前の日本に於ける唯一の宗教であつたといふ事が言へます。

二十　神道と政治

それから我が邦に於きましては昔から色々な本に書いてある通り、神居

帝座共の殿を共にす。神居も帝座も一つである。君と神とは一體である。君即神。神即君である。祭祀國政相分れず、祭と政と分れては居らない。さう云ふ工合に神道は支那に於ける王道とか覇道とかいふ政治の道が日本に這入つて來ます前の唯一の政治の道である。即ち王道覇道が這入つて來る前に政治は立派に神道に依つて行はれて居つた。此の點から見れば神道は政道であるといふのは間違ひで無い。

二十一　神道の意義

さう云ふ工合に神道といふものは解釋の出來るものであります。即ち德教とも解釋が附き宗教とも解釋が附き、政道とも解釋が附くのであります。解釋は附くのでありますけれ共、併し單純に宗教では無い。單純に德教では無い。單純に政道では無いのであります。詰り是れ等の各方面を包含して居る處の一つの大いなる道である。是れが神道である。神道は大和民族が昔から、神道の語で申すと惟神(カンナガラ)的に鎔鑄陶冶して來たところの一つの大いなる道である。でありますから此の神道は我々の知識の方面から要求しますと、茲に立派な政治の道、經濟の道、さう云ふ道となつて現はれて來るのであります。感情の方面から要求しますと茲に立派な宗教となつて現はれて來るのであります。我々をして能く安心立命せしむる所のものであります。意志の方面から要求して來ますと、茲に剛健なる道德となつて現はれて來るのであります。詰り神道は即ち政治でもあり、道德でもあり、宗教でもあるのであります。斯う云ふ神道が昔から行はれて來たお日本でありますから、隨分此の貴ふべき國體は危險に瀕したことも歷史に見えて居ることであるが、其の危險に瀕した場合に能く其の危機を脫し、此の國體の尊嚴を維持して來たのであります。即ち神道といふ政治の基礎があつて、是れが上下に通じて行はれて居るから、此の國體の尊嚴は維持せられて來たのであります。此の神道といふ宗教がズーッと昔から日本

に行渡つて行はれて來たのでありますから、假令佛敎と云ふ風な偉大な勢力を有する宗敎が日本に這入つて來ても、國民はスッカリそれを信仰しきつて仕舞ふと云ふ事は無いのであります。若し此の神道といふ宗敎が無かつたならば歐羅巴に於ける狀態と同じであります。歐羅巴ではどうでありますか。矢張り歐羅巴人は基督敎が這入つて來る前に一種の宗敎を持つて居つた。けれ共其の宗敎と云ふものは極めて薄弱、極めて幼稚な宗敎であつたのですから、基督敎が這入つて來れば漸次それに改宗して、何時の間にか歐羅巴各國は基督敎國になつて、古い宗敎は殆んど跡形も無い樣に亡びて、基督敎が其の位地を取つて仕舞つたのであります。所が日本はさうはいかぬ。アレ程の勢力を有して居つた佛敎が盛に行はれても、日本國民は基督敎が歐洲國民を變化した樣な工合に變化さする事は出來ぬ。即ち神道が一種の宗敎として非常に深き根柢を日本國民の間に持つて居ると云ふことは此の點に於いて明白であります。更に道德と云ふ方面から見ましても、此の神道といふ偉大な勢力を持つ道德が日本に行はれましたから、君に忠、親に孝といふ風な事は、日本國民にチャンと存在して居る。それを儒敎が這入つて來て非常に長養したのは明かに認めますけれども併し儒敎が無くても、君に忠、親に孝といふ風な精神は日本國民にチャンと存在して居るのである。是れが即ち神道の偉大な道德であると云ふ證據であります。斯樣に神道といふものは宗敎であり、道德であり、又政道である各方面を包含して居る、一の大いなる道であります。然らばその神道の內容はどうだ。道德・宗敎・政道を包含して居る神道といふものは何ふ云ふものであるかといふと、是れは大變重大なる問題になつて來る。即ち神道の骨髓根本はどう云ふものであるかと云ふのでありまして、極めて重大な問題であります。で、後章に段々述べる積りでありますが、茲でも少しく之れを述べて置かんと順序がたちませんから之れを引括めて極く簡單に茲に述べやうと思ひます。

二十二　神道と我が國民的精神

詰り神道と云ふ道の起原は何であるかと申すと、我が國民固有の精神である。我が國民固有の精神が神道の起原である。而してその我が國民固有の精神の活動の規範は何處に在るかといふと、我が古代の神聖即ち天照大神を初め幾多の神聖が示され行はれた事蹟である。之れが我が國民の活動の規範になつて居る。神道は此のものであります。

それで、我が國民の固有の精神とは何う云ふ物かといふと、次の表の如きものであります。

我國民固有の精神
- 秩序的統一的思想（の發達の極致は神鏡）
- 現世的快活的感情（の發達の極致は神璽）
- 發展的膨脹的性格（の發達の極致は神劍）

天壤無窮の國運發展

勿論何處の國の人でも、かう云ふ風な精神の傾向を具へて居らぬ人間はありません。けれども、日本國民固有の精神は此の秩序的統一的思想、現世的快活的感情、發展的膨脹的性格に非常に富んで居るのであります。是れが日本國民固有の精神であります。是れはマア詳しいことを言へば大變長くなりますが、此の文字で表はした處で大底は御分りになるだらうと思ひます。此の秩序を重んじ統一を尊重すると云ふにも、その實例は甚だ多う御座います。かの「海行かばみづく屍、山行かば草むす屍。大皇の辺にこそ死なめ。のどには死なじ」と詠じ、又「山はさけ海はあせなん世なりとも君に二心我あらめやも」と詠ずるが如きは勿論、我が國民がひどく清潔を重んずるといふ風な事はこの秩序の方に屬するのです。又現世的であるといふのは、未來を考へ、未來の幸福を望む。即ち彼の基督教國民の樣に未來は天國に生れ永久の幸福を享くるを理想とするやうなことは上古の大和民族には無い。マア多少無いことも無いですけれども先づ主とする所は重もに現世的快活的感情である。それから發展的膨脹的性格も何れの國

民も多少は持つて居りますけれども日本には極めて是れが強い。

以上のやうな點から日本國民の固有の精神は成立つて居ります。此の精神が基礎となつて神道が起つて來ますのであります。斯う云ふ精神が若々實地に發現して來たのが神道であります。で、其の神道の根本規範は何處に在るかといふと此の國民的精神の精華を體せられたる古代の神聖の行はれた云爲行動といふ者に存するのであります。さう云ふものが我が國民の活動する規範となり標準となつて居るのであります。其の神聖の行はれた云爲行動の事蹟は多端であつて、ナカ〳〵少く無いのであります、けれども、併しその極々約まつた所を見ると御承知の天孫降臨の際の天壤無窮の神勅、及びそれを自ら具體的に示されて居る三種の神器といふものに歸するのであります。此の三種の神器に就いては色々說があります、此れに就いては井澤蟠龍といふ人はコー云つて居ります。即ち三種の神器は神代の經典なり、古へは字も無く書も無ければ、此の三種を造りて敎

とし、皇孫に示し、神器のたとへの三德を守り玉はゝ、寶祚の隆えん事、まさに天壤と窮なかる可しとの御敎なりと言ふのでありますが、詰り此の三種の神器といふものは抽象的なる我が國民固有の精神をば具體的なる神器に依つて示されたものである。勿論天照大神が三種の神器を取りて、我が國民的精神を吾々が考ふるやうに意識的に授けられたのではありますまいが、久保季茲氏の說の樣に自ら之れに因つて示されたものと思はれます。さう云ふ次第で此の秩序的統一的思想の發達の極致は神鏡であり、現世的快活的感情の發達の極致は神璽であり、發展的膨脹的性格の發達の極致をば神劍であると認めることが出來る。それ等各々の精神の發達の極致をば三種の神器に依つて示されて居るのであります。所で是れが遂に終極する所はドーしても一つになつて來なくてはならない。一つに歸着するのが一般事象の通則であります。是れが一つに極まつた所は何うかといふと、詰り前に表に示しました天壤無窮の國運發展といふこと、即ちかの神勅

の聖旨になるので、是れが日本國民の大理想であります。此の樣な次第で近來の一大學者なる本居宣長翁は斯う言うて居られる。即ち天壤無窮の勅命は是れ道の根元大本なりと云うて居らるゝのであります。此の勅命が道の根元大本であると、唯普通に讀みますと、實祚の隆、天壤と窮なかる可しとの此の勅命が何う云ふ譯で道の根元となるのであらうか、唯單にあの神勅を讀んだばかりでは何故に道の根元大本であるかといふ事が分らぬです。けれども併し斯う云ふ風に考へて見ると初めて此の勅語が道の根元大本であるといふことが首肯せらるゝのであります。

第四章　上古の神道

二十三　神道の變遷

右のやうな次第で神道の骨髓根本となるもの、即ち先きに申した宗教とか政治とか道德とかいふものとなる其の物の內容は詰り我が國民的精神の精華を體せられたる神聖の事蹟にありと雖も、時勢の發達、文運の進歩、さう云ふものに連れて此の神道の內容の發表着色は色々に變つて來る、其の神道の內容の公けに發表せらるゝ方向は色々に變つて來るのであります。決して一定して居らない。その着色、その發表の如何に依りまして、此の神道の盛衰消長といふ事が現はれて來る。內容そのものに至つては少しも變らないけれども、其の着色、其の發表の如何に依つて神道といふものが盛衰消長を來たすのであります。

二十四　上代の日本國民

そこで其の盛衰消長して來た歷史に依つて調べて見ますと、上代の日本國民には特別のバイブルや、經典といふ物は無いのでありました。されど古語拾遺に、前言往行存して忘れずとあつて、前に言はれた言葉なり、實行せ

られた行なり、皆さう云ふものは、口々に傳へ存して忘れない。さう云ふ工合で神道がズッと行はれましたから國民は十分に知識の要求も滿足し、感情の要求も滿足し、意志の要求も滿足して居つたのであります。所が一方では儒教や佛教が這入つて來ますし、他方では物質的文明が非常に發達して來ました。さう云ふ風で一般の文明が發達して來ますと、從來の山から堀出した計の玉のやうな神道ではどことなく滿足が出來なくなつて來た。そこで之れを何んとかしなくてはならなくなつて來た。けれどもそれかと言つて日本人の中には釋迦、基督、カントの樣な偉い人が出て來て此の根柢の上にウンと系統を組織して、それの整然たる組織を示すと云ふ事は出來なかつた。自己の思想を以つて之れに大着色を加へ、一大系統となすことは出來なかつた。詰り偉い人は有つたですけれども、日本人の偉い人といふのは秀吉とか家康とか多く他の方面にあるので、釋迦や基督やカントの見たやうな頭腦の組織的に出來た、アヽ云ふ風な偉い人で無い。だから儒教だの佛教だの這入つて來ますと、直に支那の思想なり印度の思想なりを採つて來て、さうして此の固有の神道に着色し、その發表を變化するといふ風な事が行はれて來て、之れで滿足を得やうと云ふ風になつて來ました。即ちかう云ふ風にして我が國民の精神の要求に應じやうといふことになりました。

二十五　儒教の影響

が、古代に這入つて來ました儒教は原始儒教であつて、後世の宋儒の樣で無いから、其の事の文字に現はれたと現はれないとの別はありますけれども、從來の神道と甚しく違はない。從つて之れに依つて神道の着色は著しく行はれませんでした。

二十六　佛教の影響

儒教に尋いで這入つて來ましたのは佛教でありますが、是れは讀者諸君の御承知の通り非常に幽遠な道理を持つて居る。その幽遠な道理を持つて居るものを百濟からして日本へ獻る時に非常な讃辭を以つて獻つた。『日本書紀』を御覽になると分ります。百濟王は此の法は諸法の中に於いて最も殊に勝れて居る。解し難く入り難い。周公孔子も尙知ることが出來ない。此の法は能く無量無邊寶に限ない福德果報を生じ乃至無上菩提を成辨す。譬へば人の意に隨ふ寶を懷いて用ひ盡す可き所に從つて心の儘なるが如く、此の妙法の寶も亦復然りで、もとめ願つて心に從ひ乏しき所はないと云ふのであります。從つてさう云ふ立派な法ならば並々の人は誰でも其の方に向はざるを得ない。百濟王はさう云ふ言葉を以つて燦然たる佛像一軀經論若干卷を獻じたのであります。けれども已に申しました通り神道が日本に行はれて居るから如何に立派な讃辭を以つて之れを獻つても、さうやす〳〵と日本人は其の方に心を向けない。當時の神道家でありました物部尾輿とかその子守屋とか中臣鎌子その子の勝海とかが痛く之れを排斥した。盛に排斥した。けれども、當時一般の急進黨即ち今日で言へばハイカラといふ風な人々の中には、厩戸皇子とか蘇我馬子といふ如き貴い人々も居らるゝので、それらの人々が之れを信ぜらるゝものでありますから、何うしても勢ひ盛んにならざるを得ないのであります。で、欽明天皇の十三年(此の年代には色々議論がありますけれども、普通十三年と云ふ)に佛教が這入つて、それから後七十年ばかり經ちますと、モウ既に寺の數は四十六、僧尼の數は千三百餘人あつたと書いてあります。僅か七十年ばかりの間にさう云ふ風に佛教が隆盛を致したのである。

二十七　朝廷の態度

さう云ふ工合に佛教が隆盛になつたらば我が邦に昔からあつた神道は段々亡びて來るかといふとさうで無い。佛教は斯く盛になつても朝廷に

於いては、神道は我が邦政治の大本である。斯う云ふことで、始終支持されて居りました。色々な事實に於いて神道は實に我が邦の政治の根本であるといふことが始終示されました。かの孝德天皇の時に蘇我石川麻呂といふ者が朝廷へ申上げるのに先づ神祇を祭つて然る後政事を議さなくてはならぬといふ事を以つてし、又孝德天皇も詔を下して斯う言はれて居られます。公卿百官、清白(アキラ)けき意を以つて神祇を敬ひまつり並に休祥を享け天下を榮えしめよと。それから又天武天皇の五年に天下に詔して大解除(オホハラヒ)を行へといふことを命ぜられました。大解除は詰り神道の典禮でありますが、それから聖武天皇は非常に佛教を信ぜられた天子樣でありますが、その聖武天皇の神龜二年に諸國に神社を淸くして祭れといふ事を命ぜられて居ります。さう云ふ風に朝廷から屢々神樣を祭れ、神樣を祭れといふ事が示されて居る。それと同時に神道に依る所のものが無くてはならぬ。斯う云ふ風に色々社會の事件が繁雜になつて來ては何うしても神道に依る所のものがなくてはならぬといふ考から『古事記』『日本書紀』といふ樣な本も其の頃に出來て居るのであります。

二十八　國民の煩悶

茲に非常に注意すべきことは、朝廷に於いてはさう云ふ風に國民に神道を皷吹された。佛教が盛んになつても神道を忘れることの無い樣に國民に非常に神道を皷吹されて居る。が併し日本國民と言つても澤山の人でありますから、その中には矢張りハイカラ連中即ち急進黨といふ者もナカ〳〵少くない。急進黨で無いにしても、佛教は非常に幽玄な道理を以つて道入つた宗教だから、それを一つ信じて見たい。佛教はどう云ふ教か聽いて見たいといふ心が出ます。けれども亦一方には神道といふものがある、是れは日本國民固有の道である。どうしても之れに依つて我々の云爲行動を律しなくてはならぬ。のみならず朝廷から屢々さう云ふ風な御教令

が下かるから、此處はどうしたものであらう。詰り日本國民の間に非常な精神の衝突を起した。マア今日で言へば煩悶です。一方で佛教は大變宜い、福德圓滿などゝいふから一つ信じて見たいと思ふ。けれども、一方ではイヤそんな蕃神を拜してはいかぬ。そんな外國の教を信じてはならぬ。國民固有の神道があり、朝廷からも屢々斯う云ふ仰があるとすれば、此處は何うしたものであらうと國民の精神に衝突を起した。尤もその中でも極冷靜な人は、ナアニといふので佛教を信じて居るけれ共少し熱情を持つて居る人は非常に此處で躊躇した。是れは下々の者ばかりでは無い。當時の貴顯の御方からしてさうあらせられた樣であります。佛教は信じたいが信じたら神道に悖りはしないか。神の罰を受けはしないか。如何なものであらうといふ樣な、其の點に於いて非常に惑はるゝと云ふ有樣でありました。一般の國民は勿論右の通り惑つて居ました。佛教家が大いに佛教を弘めやうと思つて居るけれどもどうもさうはいかぬ。いかぬのはそこに惑つて居るからである。そこで佛教家が考へて例の神佛習合といふことを考へ出しました。

二十九　神佛習合

神佛習合は色々の方面からやつたのでありますが、彼の行基がやつたのは中々大膽な仕方であつたやうであります。行基は我が國民信仰の中心である伊勢大神宮に匹するものを佛教にも有するにあらずんば佛教興隆しがたしと考へたもので、當時の聖武天皇及び光明皇后が厚く佛教を信せらるゝに乘じて、遂に天照大神即ち毘盧遮那佛との信念を天皇に抱かしめ、連りに天皇皇后を慫慂して、かの奈良大佛を作らしめたのであります。奈良の大佛は當時の神佛習合の一大紀念であります。それから尙神佛習合の著しいのは、宇佐八幡宮であります。宇佐八幡宮が奈良の大佛に參詣をしたいと仰せられて態々九州から奈良の東大寺へ御參詣になるといふ一

條になつた。そこで朝廷から迎神使といふ者を定めてそれを御迎になる、天子様も宇佐八幡宮の御供をなさつて東大寺へ御參詣になつたと云ふ次第であります。さう云ふ神佛習合の方法が行はれたから、神佛の間が今までの様に格別違つたもので無いといふ感じが起つて參りました。コー云ふ次第で遂に當時の天子様からして已に神佛はしかく異なるものでないと云ふ御確信を有さるゝやうになられたもので、今度は更に朝廷の方からもさう云ふ事を臣民に示される様になりました。その著しき例は孝謙天皇の詔勅で、天平神護元年十一月の詔に、今宣く、今日は大新嘗のなほらひの豐明聞めす日なり。即ち今日は大新嘗の儀式畢つて御酒宴の日である。然るに此の度の常より異なる所以は朕は佛の御弟子として菩薩の戒を受け玉ひてあり。之れに依りて上つ方は三寶に供へまつり、次は天ッ社國ッ社の神等をも敬ひまつり云々と云ふ風に宣はせてあります。此の詔勅によつて見ますと天子様を始として百官皆三寶をまづ祭られたものと見えます。

それから一歩を進めて斯う云ふ事を宣はつて居ります。又のりたまはく、神だちをば三寶(ホトケ)よりさけて觸れぬものぞとなも人の思ひてある。即ち神様を祭る者は佛に觸れてはいかぬ。佛に觸れた者は神様にさはつてはならぬといふ風に人が思うて居る。然れでも經を見奉れば佛の御法を護り奉り尊み奉るは諸々の神だちに在しけり。コー云ふ風に申されました。勿論經文に據れば天竺に於いて諸天善神と云ふ風な色々の神々か佛法を護らるゝと云つてありますが日本の神様は天竺の神様とは違ひますのですけれ共、一つにして佛の御法を護り尊み奉るものに在しけりといふ意味で仰せたのであります。それから續いて故(カレ)こゝを以て家を出でし人(出家)も白衣(シロギヌ)(普通一般の人)も相交はりてつかへ奉るに豈障はることは有らじと念(オモ)ほしてなも、もと忌みしが如く忌まずしてこの大嘗は開しめすとのり玉ふ御命を諸々聞食さへと宣ると勅したまひました。詰り之れに依つて見ますと、今までは神道と佛教とを非常に離して神佛は丸るで反對なものゝ

考で居つたけれ共、經の中を見ると矢張り神樣が佛敎を護つて御出でになるから、さうして見ると詰り神佛は別なものでは無い。出家の者も出家しない者も一緒に交つて祭りをしても差支ない。詰り神佛一體であるといふ考であると思れます。神樣も第一に佛に參詣したいと仰しやり、又天子樣からも斯う云ふ御詔勅が下がるとして見れば、後世新に傳はつて來た佛も從來の日本の神樣も大いなる差は無い。佛を祭れば神樣も御褒めになる次第であるといふ考へで段々と神佛習合といふことが一般に行はれて來た次第であります。

第五章　中古の神道

三十　山王一實神道

其處へ御承知の最澄空海といふ實に偉大な佛敎家が出て來ました。そして此の神佛習合に一層の勢力を加へて來ました。それはどうかといふと今言ふ通り神佛は元來違はない者であると云ふことは、朝廷にても眼前に實際神佛を同樣に尊敬される事でわかる。で、同一とは思ふけれ共、何處と無く不安心な處もある。理窟から考へると何だか不安心だ。一緒であると信仰して宜いとは思ふけれ共、併し又考へて見ると、何う、だかどうも本當に同じか何うか解らぬと云ふ一種の感情が當時の國民に起りました。其の感情を一掃せんが爲に今度は道理の方から神佛は一體である。神道佛道一理であるといふ事を示す必要が生じて來ます。そこで山王一實神道或は兩部習合神道といふ風なものが起つて來ました。此の山王神道は世間一般に傳敎大師最澄が始めたものであるといふ事を申して居ります。が併し是れは大變疑問であつて最澄が果して始めたものかどうか確と分らないのであります。それで此の人の著書を見まして、若し著書に是れが書いてあるならばさうであるけれ共、書いて無ければさうとは斷言が出來

ないのは勿論であります。此の人の著書は色々ありますがどうも僞書が多う御座います。けれども『顯戒論』といふものと『守護國界章』と云ふものは誰が見ても此の人が本當に書いた本であるといふのであります。で、その本を讀んで見まするに何分山王神道の事に就いては見當りません。それで眞に山王神道は最澄が一番始めに唱へたものだといふことはどうも斷言が出來ません。丁度それはマア最澄といふ人が支那に入唐して天台宗と眞言の密宗それから禪宗を傳へた人であるが、此の人が此の三つを融合調和して自分のものとして說いたのであるか、或は天台宗は天台宗、眞言宗は眞言宗、禪宗は禪宗といふ樣な工合に說いたものか分らないやうなものであります。兎も角も今日の學者の間には最澄は台密禪の三つの宗敎を調和した法門を擧揚せんと志したものらしい。即ち一般に少くともさう云ふ傾向を持つて居つたものとせられて居ります。それと同樣に後世に所謂山王神道となつたそのものを此の最澄が說いたので無くして、唯、其の山王神道の初步、濫觴をなしたものであるといふ事は斷言して差支ないのであると思ひます。それは何う云ふ處に根據があるか、何に依つてさういふ事を斷言するかと申しますと、此の人の傳記によるのであります。此の人の傳記は『本朝高僧傳』だの『元亨釋書』などに書いてありますが、其の傳記を見ると此の人の父の百枝といふ人が此の人に向つて言ふに、昔私が神樣に祈つてお前は生れた子である、所がまだ神樣に對して御恩德を報じない。御前はどうか私に代つてお前の生れて來た御恩德を神樣に御禮をせよと申しました。そこで最澄は父の命に從ひ神宮院に詣り勤修して香爐の灰中から舍利を得たといふことが書いてあります。それから宇佐八幡宮は當時非常に信仰されたのでありますが、最澄は弘仁五年の春宇佐八幡宮の前で『法華經』を講じた。所が其の講義が終つて仕舞ひますと神樣の御託げに、法味を受けずして久しく年を經た。今微言を聽く。何を以つて德に報ひむ。幸に我れに法衣あり。願くは願達を表せんと言はれて、齋殿を

啓いて紫の法衣を二枚推し出されたと云ふ事が書いてあります。其の他賀春明神も最澄に和尚慈悲我が業報を救へと宣ひ、爲に昼夜守護すべきを誓はれたと云ひ、又鹿島大神も歸依せられたと申して傳へて居りますが、勿論此れ等は非常に此の人を崇拜して居る人々が、此の人を神樣のやうにしやうと、斯う思ふ處から、さう云ふ記事を書いた所も尠くなからうと思はれます。けれ共、併しそれは悉くさうとは思はれない。昔の基督でも釋迦でも或は希臘のピタゴラスといふ樣な人に就いても皆奇蹟といふものがあります。詰り信徒が其の人を偉くしやうと思つて色々附會をする。最澄に就いても色々さう云ふ事がありますけれ共、併し最澄といふ人がさう云ふ事を多少自分に言つたのは事實らしい。法衣を二つ貰たといふ風な事は、それ程までに行かないでも多少さう云ふ事を言つたのは事實であらう。兎に角此の人が神佛習合といふ事の爲に力を盡したことは斯う云ふ事蹟の殘つて居るに依つても判斷が附くのであります。之れを以つて私は此の人が後世の山王の神道そのものを唱へたのではありませぬが、とに角此の神道の端緒を起したものであるといふ事を斷言しやうといふのであります。さう云ふ端緒が起されたから此の最澄の法を嗣いで居る處の後の人々共は皆此の山王神道の興隆に力を盡した。そこで山王神道といふものは一時非常な勢力を有ち、例の日枝神社といふ者は大變な勢ひで、白河法皇が自分の意のまゝにならぬものが三つある。鴨川の水、雙六の賽、それから山法師だ。斯う云ふ事を言はれたといふのでありますが、山法師は山王神の神輿を持出して暴れた徒であります。詰りこは日枝神社の盛大即ち山王神道が盛であつたことを示して居るのであります。そこで山王神道の教義といふものは長くなるから茲に精しくは申されませぬが、唯、天台宗に於いて空假中といふことを言ふ。是れ即ち三諦とか三觀とか云ふので、此れから出て居る三諦一境、一心三觀などいふのが根本義であります。

序いでに此の山王と云ふ文字に就いて申しますが、元來此の山王と云ふ文字は、前田夏蔭が日吉山王の號は支那天台山の山王元弼眞君に擬へて稱へ初めたるものだと申しましたが、どうもその通りで最澄が叡山に天台宗の根據を作るに就き、支那天台山の鎮守たる山王をやはり祭つたものと見えます。所が叡山には『古事記』に御年神が天知迦流美豆比賣に娶ひまして生みませる大山咋神がましますと記されたる通り、大山咋神が祀られてありますから、山王神を祭るに一寸工合がわるい。そこで彼の徒は色々の說を作り出しました。林羅山が『本朝神社考』に傳へます所を見ますに、按ずるに日吉神號は、傳敎小比叡峯に於いて、三光の月輪を見る。釋迦藥師彌陀の像を現ず。敎その名を問ふ。神告げて曰はく、竪の三點に横の一點を加ふ。横の三點に竪の一點を添ふ。言ひ已つてその光空に昇つて去る。敎文字に之れを見るに竪の三點に横の一點を山字となす。横の三點に竪の一點を王字となす。高大不動なるものは山也。三才に經緯たるものは王也。是れに由つて遂に崇んで號して山王と曰ふ」と。これは平田翁がこの竪の三點横の三點などいふ僞言は、謂ゆる謎々にて若輩なことである。釋迦や彌陀が天竺から來つて漢字の謎をかけて行くこともない。なんとか云ひ樣もあらうものだ。是れにて最澄が學問の程も知らるゝと申されましたが、最澄が果して自らコンナ事を申したか、何うかは問題と思ひますが何れにしても作りごとでありますから、之れが色々に傳はつて居ります。即ち慈覺大師の語としてはコンナに傳はつて居ります。先師求法歸朝海中に暴風雨に遇はれました。至心に發願して祈念せらるゝと、一人の童子が船頭に現はれ出た。先師が誰だと云はるゝと、童子が吾れは天台山の鎮守圓宗擁護の明神である。佛法東漸するに隨ひ、聖人を本國に屆けんとするものである。我が名は竪の三點を下し横の一點を加へ、横の三點を引いて竪の一點を加ふるものであると。そこで先師が恭敬合掌して偈を唱へられたが、首を上げらるゝと童子はモー見えなかつたと傳はつて居ります。

コー云ふ工合に附會に重ぬるに附會を以つてして、遂には山王と云ふ文字は三諦即一の眞理を表はされて居るものだなどゝして、進んでコー云ふ風に說いて居ります。即ち八百萬の神々は皆是れ三諦一實の妙理に基いて無窮の化道を施したまふなど、天台の敎義を以つて一つの神道を說いて居ります。即ち我が固有の神道を天台の敎義を以つて着色したのであります。

三十一　兩部習合神道

それに次ぎましては例の兩部神道であります。是れは矢張り一般に弘法大師空海の始めたものだと言ふのであります。けれ共例の山王神道が最澄に依つて始められたのがどうも極めて分らないと同じ樣に此の兩部神道も空海即ち弘法大師に依つて始められたものであるかどうかといふ事は疑問であります。此の兩部神道に於ける一番大事な本、『麗氣記』は空海の作として高野山に秘密に傳はつて居つたといふのでありますけれ共、併し此の本は空海以後の人が、僞作して名を空海の作に託したものであるといふことは多數の學者が皆信じて居りますが、矢張り先きの山王神道と同じ樣に孝謙天皇の詔勅が出ました樣な社會の事情の必然の結果として、日本に於ける有史以來の人物の一に數へられる空海その人の如きに依つて兩部神道の端緒が起されたいといふのは、必ずしも無稽の說とは思はれません。即ち兩部神道其の者が作られたと言つては少し語弊が有るかも知りませぬが、兩部神道の端緒が弘法大師空海に依つて創められたのであるといふ事は斷言が出來やうと思ひます。それと云ふは空海の傳記の中に、先の最澄と同じやうな神佛習合の事蹟が矢張り傳つて居るから、私は同じ結論を得るのであります。さう云ふ譯で空海に依つて創められた後、歷代の眞言佛敎家は、之れを非常に修正改善して遂にあのやうな兩部習合神道といふものを作つたものと見えます。其の兩部神道が中古に於いて非

常な勢力を有つて居つたといふことは色々の事實に依つて分ります。北畠親房卿などは色々の本を著はされたえらい學者でありますけれ共あの『神皇正統記』の中に斯う云ふ事が書いてあります。即ち我國は神代よりの緣起此の宗の所說に符合せり。神代よりの緣起は此の眞言宗の說く處に符合して居る。斯う云ふ事を親房卿は信じて居られたのであります。詰り、眞言宗の敎理が我が國古來の緣起に一致して居ると云はれて居るのであります。何故親房卿がさう云ふ事を言はれたか。これは兩部神道家の敎義は一般社會の當時の信仰であつて、親房卿もそれを信じて少しも疑はれなかつたものであります。

そこで眞言敎理に依つて說かれた兩部神道といふものは何う云ふものであるか。チョッと摘んで申しますといふと、眞言宗に於いては體相用といふ事を言ふ。之れを三大といふ。此の三大といふのは先づ宇宙の實體宇宙の本體を體大と申し、相大といふのは眞言宗では四蔓荼羅などゝ言つて六つかしい字が書いてある。詰り相大は form であるのです。宇宙の實體が此の人間その他草木山川禽獸蟲魚の形を取る所の形式を相大と申すのであります。それから今度用大といふのは其の物が活動する身口意の三つを用大と申すのです。詰り萬物の作用の方面であります。體大は相大に依つて形を現じ、用大に依つて活動す。三大は一口に云へば先づ是れだけのことです。是れが眞言敎理の骨子であります。此の體大即ち宇宙の實體を地水火風空識に分ち、之れを又六大と申します。六大が即ち世界の本體であります。此の中で前の五つを例の胎藏界といひ、それから識の一つを金剛界と言ひます。マア詰り人間の身體に就いて言ひますと地水火風空といふのは身體であつて、識大といふのが精神であります。此の身體のことを色と言ひ、精神のことを心と申します。そこで眞言宗では金胎一致、色心不離と說き、其の一つとなつたところが即ち大日如來と斯う說いて來ます。さうしまして胎藏界は色に配合し金剛界は心に配合するので

あります。肉體と精神は不離で宇宙の本體即ち大日如來に歸します。之れを神道に持つて來て伊非冊尊は胎藏界で伊非諾尊は金剛界であると斯う說くのであります。それから又兩部にては之れを伊勢の兩太神宮に持つて來ましたのです。所で天照太神は胎藏界である、天照太神は女の神樣で御出でになるから胎藏界と申しました。而してモウ一方の豐受大神は御食津神でありまするが、御食津神は、矢張り女の神樣といふ樣になつて居ります。さう云ふ譯で之れを金剛界とするのは工合が惡い。そこで國常立尊即ち天御中主神と斯う云ふ風にして、參つて來た。今日でも外宮は天御中主神或は國常立尊だといふ風に信じて居る者があるのは、兩部神道から來たことであります。さう云ふ風に說いて來ました。兎に角マア胎藏界を太陽にし、金剛界は月にして、さうして外宮と內宮とに當てゝ斯ふ云ふ風な事を書いて居る。即ち兩宮兩部不二、三世常住の神に在はす。理智の形に應じて天照太神豐受太神に在はす。是れ兩部の元祖。佛法の本源也。

と、それから尙斯う書いて居ります。即ち兩部の大日色心和合して一體をなす。即ち豐受太神宮內に一所に並び在す也。此の事外にして言ふ勿れ。兩宮の崇り坐はすべきが故にと述べて居ります。詰り伊勢の兩太神宮を眞言敎理の金剛界、胎藏界に融合しそれを根本として、是れから神代のあらゆる神々は皆眞言宗の佛に習合して仕舞ひ、かくして盛に本地垂跡說を唱へ出して、遂に兩部神道は、伊勢の太神宮でも本地は大日如來であると言ふて、天下の神社に大底本地佛を作り、之れに仕ふるに社僧なるものを以つて、天下の神社を擧げて殆んど悉く眞言宗の支配に歸して兩部神道は非常な勢力を有つて來たのであります。が、どうも日本國民は之れでもまだ裏心滿足することは出來ないのであります。

三十二　唯一神道

以上述べて來ましたやうな工合で、山王一實神道、兩部習合神道が非常な

勢力を有して來まして天下の神社は殆んど皆佛教家の手に歸する樣になつて參りました。けれ共、さういふ神道は餘りに多く佛教に依つて着色せられ、殆んど全く佛教によつて建立せられたるもので、日本國民――少くとも日本國民の強き國民的精神を有する人の氣に喰はぬ。そこで守屋、勝海の如き強き國民的精神を有する人々は是非とも一つ固有の神道を興隆しやうと云ふ考を當然有して居ります。さう云ふ精神の要求として唯一神道が起つて來ました。唯一神道は卜部家の神道であります。王氏・中臣氏・齋部氏と共に神祇の四姓と云ひ相共に殆んど中古朝廷に於ける神道の全權を握つて居ました卜部家の神道であります。其の主張はどう云ふのであるかといふと、吾が神道は一陰一陽の不測の元である。國常立尊以後天照太神に至る玄々妙々の相承である。天照太神が天兒屋根命に授け玉はりてより以來濁世末代の今日に至る迄、一氣の元水を汲んで遂に三教の一滴を嘗めずと主張して居るのであります。詰り國常立尊から天兒屋根命に傳はり、それから卜部家に代々傳はつて來たので、即ち一氣の元水を嫡々に傳へて儒教・佛教・道教の三教の一滴をも嘗めない神道であると斯う云ふ風に說いたのであります。が、其の神道を能く調べて見ますと、矢張りその根本には先きの眞言家の體・相・用の說が採用してあります。即ち神道に三義あり、之れを體・用・相といふなどゝしてあります。斯う云ふ風に文字がソックリ、其の儘使つてあります。其の他色々佛教のことが採用してあります。三教の一滴を嘗めずと一方で言つて置き乍ら一方に於いて其の文字がソックリ斯う云ふ風に使つてある。勿論此の體・用・相の說明は違つて居ます。併し何れにしても其の文字を其の儘に使はないでも宜いと思はれます。已に文字さへ其の儘使はなくてならない位哲學的頭腦が淺弱なのでありますから三教の一滴を嘗めないなどゝ大聲疾呼しましても、その神道は非常に儒教・佛教に據つて居ります。殊に佛教の天台・眞言に據つて居ると申さるゝのは止むを得ないことであらうと思ひます。併し之れには又辯解

してあります。即ち第三十四代推古天皇の御宇、上宮太子密奏して言はく、吾が日本は種子を生じ、震旦は枝葉を現じ、天竺は花實を開く。であるから佛教は萬法の花實で、儒教は萬法の枝葉、神道は萬法の根本である。かの儒教、佛教は神道の分化である。枝葉花實を以つて其の根源を顯はす。詰り枝葉花實を以つて其の根本を顯はすのだから些とも恥かしい事は無い。斯う云ふのであります。これが卜部家の神道であります。かく教義が佛教に據つて居るばかりで無く、其の儀式も佛教に據つて居つて神道護摩とか、神道加持とか、神道灌頂とか云ふ風な色々の宗教的儀式をやつたものであります。此の神道護摩とか、神道加持とかいふ言葉は天兒屋根命から傳はつて來て居ると云ふ事を言ひます。神道護摩とか加持とかいふ言葉が昔の日本語であると言ふのであります。けれ共それは僻事である。あの『鹽尻』といふ本に神道護摩といふ題目があつて、其の下に斯う云ふ事が書いてあります。吉田兼俱の子、僧九江、吉田山下に一寺を建てゝ神龍院と號づけ、九江法師此の寺に初めて行ひ初めし法である。即ち九江法師が神龍院で、護摩とか加持とかいふ眞言宗の儀式を取つて神道といふ字をその上につけて行ひ初めた法であると云ふのです。それであるから僧こそ修すべきに、今祠宮等傳授して之れを修するは實に似氣なき妄作であるといふ風な事が書いてあります。實にその通りで眞言家の行ふべきもので、神官の行ふべきものでは無い。然るに中古以後の神官だち多くは吉田家へ行つて、神道護摩を授かつたり、神道加持を受けたりするやうな事をやつて居ましたのは實に訝かしいといふ釋なのであります。さふ云ふ工合で唯一神道は儀式まで佛教に據つて居るのであります。これと云ふも周圍の狀況よりして實に止むを得なかつたものと思はれます。

三十三　親房卿の神道

かふ云ふ風に此の唯一神道が宗教的方面に勢力を布殖して居ます間に

別に學者の態度を以つて神道を說かれた人がありました。是れは北畠親房卿であります。親房卿は御存じの通り南朝の忠臣でひどく叛賊を憤り、王室を憂へ、神皇の正統を明にし、萬世の綱紀を正さんとせられたのであります。從つて卿は三種の神器を非常に重んじ之れを三光に比し、三種の神器世に傳ふること日月星の天にあると同じ。鏡は日の體で、玉は月の精、劍は星の氣といひ、又之れを儒教の三德に比し、『尙書』には剛、柔、正直、の三德といひ、『禮記』には智仁勇の達德とも云ふ。何れにしても其の義は同じである。この三德を翕受けずしては天下の治らんこと甚だむづかしい。我が邦に於いてはこの三德を神器にあらはしたまへり。いとかたじけなきことにやと說き神器を以つて國家の眼目とする旨を述べられて居ります。

要するに卿は三種の神器を基礎として神道を說かれたるものであります。即ち固有の神道を說くに三種の神器に依られたものであります。で、聊かその說を御紹介申しませうならば、卿は先づ政に就いてコー申されて居ります。凡そ政道といふことは、正直、慈悲を本として決斷の力あるべきである。これ天照太神の明なる御敎である。一にはその人を選びて官に任じ、その人あるときは、君は垂拱してまします。されば本朝にも異朝にも、これを治世の本とするのである。二には國郡を私にしないで分つ所必ずその理のまゝにし、三には功あるをば必ず賞し、罪あるをば必ず罰すべきである。これ善をすゝめ惡をこらす道である。是れは治者の道を說かれたのでありますが、さらに臣民の本分を說き、人臣としては君を貴び、民をあはれび、天にせくゞまり地にぬきあしゝ、日月の照すを仰ぎても心のきたなくして光にあたらざらんことをおぢ、雨露の施すを見ては身の正しからずして惠にもれんことを顧みなくてはならない。と云はれ、臣民は專ら正直、慈悲を以つて皇室に仕へ、下民を慈しむべきを說かれ、下民たる者は、男夫は稼穡をつとめて己れも食し、人にも與へて飢ゑざらしめ、女子は紡績を事として自らも衣、人をも溫かならしむべきである。賤しきに似たれども人倫の

大本であると說かれて居ります。コー云ふ風に儒敎佛敎によりて卿は神道を說かれて居ります。で、儒敎佛敎を取られましたる卿の考を見まするに卿は道の弘まるべきは內典外典の力だと云ふべきである。魚を得ることは網の一目によるなれど、衆目の力なければ、之れを得ること難きが如し。應神天皇の御代より儒書ひろめられ、聖德太子の御時より釋敎をさかりにしたまひしが、これ皆權化の神聖にましませば、天照太神の御心をうけて、我が國の道をひろめ深くされたものであると云はれて居ります。熟ら考へますに卿の本來の考は固有の大道を宣揚したいと云ふにあつたのでありましたのですけれど、佛敎全盛の時代で、卿は全く時代の勢力の外に出でられず、アンナ神道を說かれたものと思はれます。つまり卿の神道說は斯う云ふ風に儒佛の思想を取り當時の智識を以つて着色せられて成立したものであります。

三十四　兼良卿の神道

次に注目すべきは一條兼良卿の神道說であります。卿の神道說といふものは何う云ふものかといふと斯う云ふ工合なのであります。即ち卿は開闢說を說かれますのに一番先きに斯う書いてある。我が邦開闢の事、幽明の迹、古へより神聖相承け、或は人に託して宣言す。而して其の說く所自ら三敎の理に符合せざる莫しと。かう云はれてありますから彼の唯一神道とは宣言が正反對に違ひます。彼れは三敎の一滴を嘗めずと言ひ、此れは自ら三敎の理に符合せざるなしと言つてある。三敎とは儒敎佛敎道敎でありますが、矢張り卿も主とする所は儒敎と佛敎とに依つて居られます。そこで卿も亦親房卿と同じやうに三種の神器を重んじて、三種の神器は神書の肝腎、王法の樞機と申されて居ります。此の言葉は兼良卿の發明の言葉で、後に之れを模して使つて居る人もあります。かう云ふ工合で、卿は三

種の神器は神道の根本なりと言つて居られる。進んで之れを儒教の說に比較して孔丘の言に仁者は憂へず、智者は惑はず、勇者は懼れずとあるが、子思の『中庸』の書には之れを三達德と謂つて居る。聖人の道大にして博しと雖も究めて之れを言へば此の三者に過ぎない。即ち智仁勇の三達德に過ぎない。是れが兼良卿の著眼點であります。卿はかくて劍の妍媸を照すは即ち智の用、玉の溫潤を含むは即ち仁の德、劍の能く剛利なるは則ち勇の義である。斯う言つて居られます。更に卿は之れを佛教に比較いたしまして劍の能く照すは般若(般若は智慧の事)である。玉の能く潔きは法身、(法身とは佛教で正覺を成じ佛に成つた當體を云ふ)である。劍の能く斷ずるは解脫(解脫とは勇猛心を起して煩惱を解脫するを云ふ)である。斯う云ふ風にして卿は佛教に比して居られます。卿が自から三教の理に符合せざる莫しと云はれて居りますのは、かう云ふ處を指されたるものであります。

兼良卿は自ら我れ菅原道眞に勝れるもの三あり。攝家に生れ太政大臣となり、延喜以後の事を暗んずと云はれ、非常に自負せられましたが、成程公卿に生れてその博學眞に敬服の至りに堪へないのであります。が、併しあまりに儒佛を過信し遂に佛教に就いては、天孫三器を以つて吾が身に隨へて下土に降らるゝことは顯にしては王法、隱にしては佛法、一切群生をして此の秘あることを悟らしむるのみだなどゝ申されたるには一向感心の出來ないことであります。

第六章　近世の神道

三十五　吉川流の神道

兼良卿は文明十三年に亡くなられたのでありますが、是れから後神道の學說を唱ふる學者が殆んど出ませんでした。唯、卜部家には兼良卿と殆ん

と同時に兼倶卿が出まして盛に唯一神道を興隆しましたのが大いに注意すべき事と思ひます。所が近世の初になりますと更に卜部家に萩原兼從といふ人が出て來ました。是れはその當時ちよつと偉らかつた人であつたらしいのです。丁度豐臣家に秀吉が亡くなつた時に豐國神社を建つるに就き、その神主は誰れにしやうか是非吉田家の人が欲しいものだといふので、兼從は吉田家を弟に讓つて、吉田といふ姓を萩原といふ姓に改め豐國大明神の神官になつた。所が德川時代となつて豐國神社を廢されると此の人は知行地一萬石あつたのを取上げて、何處かへ追ひやつてしまうと云ふ筈であつたけれ共、特別の取扱で知行はその儘にして吉田村に閉居して居ると云ふことになつたといふ事であります。此の萩原兼從の神道を傳へて起つたのが吉川惟足翁であります。此の吉川惟足翁の神道は何う云ふのかといふと矢張り親房卿や兼良卿の神道を折衷しまして、さうしてそれに陰陽五行の說或は宋儒の說を集めて來て着色をやつた神道であります。

三十六　社家神道

夫れから吉川惟足と同時に度會延佳と云ふ人が出ました。此の人伊勢の外宮の神主でありまして、一家の神道を主張したのであります。その神道は如何う云ふ神道であるかと申しますと、從來の神道は皆佛敎を加味したもので、佛敎の影響を離れて居る神道は一つもないと云ふことが出來るのであります。ところが延佳氏は、其の神道からして佛敎を排斥した、それが非常な特色である、併し此の佛敎を排斥する理由が一寸妙なのであります。それは如何う云ふ譯で排斥するかと云ふと、『神道五部書』と云ふ神道の本が外宮に傳はつて居た。之れは中古の僞作だと言ひますが、其の中に斯う言ふ文句があります。即ち佛法の息を屏くと云ふのです。所が或は佛敎家の手に成りたるにはあらずやとさへ思はる、『五部書』に佛敎排斥の

語あるは頗る可笑しいのであります。で、吉見幸和と云ふ人の說では、屏はしりぞくとも云ふ字だけれども排斥と云ふ意味では無い、コヽでは藏の義で、佛法の息を內に屏藏して表には神祇を崇べとの義である、決して排斥する意味でないと主張して居ります。つまり幸和の意見は太神宮樣に對し奉つて南無阿彌陀佛を唱ふるやうなことをしないで、南無阿彌陀佛と云ふ考を胸中に藏めて、而かも太神宮樣を尊べと云ふ意味だと解釋して居るのであります。その解釋は多分さうだと思はれますが、とにかく度會延佳と云ふ人の意見としては是れは倭姫命の仰せとして傳はつて居る。倭姫命の禁令である。だから神道に於いては佛法を排斥しなければならんと言うて非常に佛敎を排斥し儒敎に依つて神道を說いたのであります。佛敎ならいかんが、儒敎なら、なせよいかと申しますと、倭姫の禁令に佛敎は屏けよとあるけれど儒敎によつて神道を說くなと云ふ事は一つもない。だから儒敎によつて說いても差支無いと、斯う延佳氏は主張するのであります。

さて其の神道は如何う云ふ者かと申しますと、重もに『易』などに依つて居ります。で斯う云ふ事を言つて居ります。陰陽の理は本朝神道の極義にて萬事萬理皆之れを以つて決定し侍ると斷言して居ります。さう云ふ次第で何かむつかしい問題に爲つて來ると皆『易』に依つて其の神道を講じて居るのであります。そこで或る人が君の神道は易習合じや無いか、今迄の神佛習合をいかんと云ふけれども易習合も可笑しいじやないか。斯う言ひますと、延佳氏は辨解しまして、我が國の神道に易道は同じと見るこそ忠厚の道ならめ。易道に神道は同じきと云ふは如何と思ひ侍ると云つて居ります。要するに延佳氏の神道は典據が宜しくない。純粹でないので、それが缺點でありますが神道そのものには敬服すべき見解が多いのであります。例へば今の世の人神道は禰宜神主の道にて、その外の人は知らんでも用なき事と思ふは甚だ以つて誤りである。神道は日本國に生れたる人は心に得て身に行はでかなはざる道だと申して居りますが、私は當時に

ありては卓見だと云ふてよいと存じます。

今迄述べて來ました親房兼良の二卿及び惟足延佳二氏の四大家の神道說には注意すべき共通の點が存して居るのであります。それは如何う云ふことかと云ふと三種の神器を以つて神道の根本とすることであります。此の點は四大家の神道に皆通じて居ります。で、一寸申して見たいのは、西洋の倫理學者が一般に申します所を見まするに、昔から人間の目的と云ふものは如何う云ふことであるかと云ふと、快樂、克己、此のどちらかである。即ち人間は出來るだけ澤山の快樂を取るのが人間の目的である。で、人間の快樂に合する者は善で、之れに反する者は惡と云ふ。是れが快樂說であります。之れに反する學者は人間の目的は其の樣なものじや無い、一切の慾情を斥けて理性に隨つて生活するのが人間の目的である。斯う云ふのは克己說であります。此の快樂說と克己說と云ふものは、昔から人間の目的に關して色々の形式を取つて現はれて來た學說でありますが、晩近一新學說が起つて參りました。それは快樂說も克己說も不可ぬ。克己說を取つて理性に隨つて生活するのが人間の目的であると云ふのは餘り人間の智を重んじ過ぎたものである。又人間の目的は快樂にあると斯う言ふのは餘り感情と云ふ方面を重んじ過ぎたのである。人間には單に感情のみならず、單に智識のみならず、意志と云ふものも別にある。で、畢竟智識と感情と意志と云ふ三方面の具備して居るのが人間の精神の特色であるから、或は快樂を主張して情に偏し、或は克己を主張して智に偏するのは、皆偏した說である。吾々は此の三方面の融合調和せられたる活動によつて能く自己の本性を實現し自己を完成しなくてはならん。是れが人生の終局の目的である。斯う言ふ事を言つて居る。之れは自我實現說と云はれて居る說でありまして西洋で最近の學說と申すのであります。所がこの四大家の說を考へて見まするとと餘ほど之れと通うて居るのであります。この點に於いて四大家の說は非常に吾々の注意すべき所のもので有らうと思

ひます。假りに吉川惟足翁の言葉を擧げて見まするとかうであります。即ち抑も〳〵此の三種此の國の眼目として萬民の依頼たるが故に、總じては人々具足の三種である。即ち三種の神器として具體的に示されて居る所のものを深く考ふれば、皆々自分の本性に具へて居る三種である。だから身を修め家を治むるの道其の他萬法是に漏れることはない。此の三種をじつと一身に收むれば即ち神。それを行へば則ち道である。是れ即ち神道である。斯う云ふ事を吉川惟足は云うて居ります。やゝ附會と目せられる所もありますが併し立派な考であると思ひます。神道と云ふものはさう云ふ處に歸して仕舞ふのであります。

三十七　垂加神道

之れから一轉しまして吉川惟足翁と度會延佳氏と此の二つの説を承けて一派の神道の説を唱へた例の山崎闇齋先生その人の説に就いて述べませう。闇齋先生の神道を垂加神道と申します。垂加と申しますのは闇齋の別號であります。闇齋と云ふのは儒者の方の號であります。垂加神道の説は前の惟足延佳二氏の説とはやゝ趣きを異にして居ります。で、闇齋先生は、先づ神道は天人唯一にして道は日の神の道、敎は猿田彦の導き玉ふ處、土金の敎、天人を貫く、敬の至りなりと唱へまして、又甚しく佛敎を斥け儒敎に依つて神道を説いたのであります。で、この天人唯一とか土金とか云のふを、一寸簡單に申しますると、天人唯一と云ふのは神代の事蹟には天の事を以つて人の事を説き、人の事を以つて天の事を説く、即ち天人唯一である。斯う云ふ風なことを意味して居るのであります。

夫れから日神の道とは天照大神の至大至高なる御德を吾れ〳〵が標準として行なつて行かねばならぬことを意味し、土金の敎とは畢竟土の訓はツヾク、ツヽマル、イツツ、金の訓はカネル、ネルと云ふので土があれば必ず金がある。土だけでは土はシマらない、金氣があるから土がシマる。其の

土のシマツタ處をつゝしみと云ふ。土金にあらざれば人も全くならない。で、土のシマル即ち敬が非常に大事であると云ふのであります。コー云ふ工合に大變な附會の說を唱へたものであります。夫れで闇齋先生の朱子學の門人で佐藤直方、淺見安正等はその附會を忌やがつて去つたものと思はれますけれども、山崎闇齋先生が斯う云ふ神道を唱へたと云ふのは、矢張り此の時世がさう云ふ神道を一種要求する處のものがあつた。つまり時世の關係と見るべきであります。附會も少くないのでありますけれども神道發展の一ッの徑路を成して居るから斯う云ふ神道も是非ひと通りは知つて置か無くてはなりません。此の垂加派から出て近世の神道に一異彩を放つたのは吉見幸和の神道でありますが、茲には略します。

三十八　水戸派の神道

山崎闇齋先生の神道はかう云ふ工合にして朱子學によつて說いたのでありますが、かう云ふ佛敎を斥けて儒敎に依つて神道を說く當時一般の傾向に促されて起つたる別派の神道があります。是れは水戸派の神道と云ふものであります。此の一派は光圀卿からだん〳〵傳はつて來て後に藤田幽谷氏とか、藤田東湖氏とか、或は會澤正志齋とか云ふ人によつて益々發達せしめられたのであります。

今迄神道の發展を述べて來ました處を顧みまするとと神道に學說的研究が行はれました以來始めは佛敎によつてその神道が說かれてあります。之れは純佛敎的神道と言つて宜しい。中頃は儒敎を加味して神道を說き、終には純粹の儒敎に入つて來ました。所が、之れが又一轉して古學神道或は復古神道と云ふものゝ勃興を見ることとなりました。

三十九　古學神道の勃興

古學神道又は復古神道は、荷田春滿翁が、少より寢となく食となく、異端を

排擊するを以つて念となす。以つて學び以つて思ふ古道を興復せずんば止むなし『創學校啓』と叫んで、盛にその說を主張せられたるに始ります。

されど翁の說は未だ圓熟を缺き自らも滿足せられなかつた者と見えます。で、翁は臨終の際その多くの著書を焚き棄てさせられました。從つて吾々は翁が如何う云ふ神道の說を唱へられましたか十分詳にすることが出來ません。けれど世に傳はりまする翁の片言隻句は、略〻翁の思想の存する所を示しますものと存じます。特に翁が「世の中に神の道とて道あらば、人の外なる人や學ばむ」と詠ぜられましたる一首は、能く翁が當時の秘傳主義の神道に反し、極めて穩健なる神道を說かれたるを知ることが出來ます。

荷田翁の學はその門人賀茂眞淵翁によりて盛に宣揚せられました。賀茂翁その神道說に就いてかう云ふことを自身云うて居られます。老子てふ人の天地のまに〻〻行はれしことこそ天が下の道にはかなひ侍るめれと云はれてありますからその神道は老子の道に多少よつて居られてある。

少くとも老子の道に類して居ることは分ります。それで賀茂翁は自ら老子の道に似て居ると云はれて居るのみならず、その說を批評せる人、たとへば淡海野公臺の如きも、我が國上古淳素因循の治を見ること彼の老聃無爲自然の道と相似たり。以爲へらく異域同揆、治國の道焉れより善きはなし。皇祚の長久萬國に勝るものはこの道を以つてのみと。是に於いて儒道を貶職して、小となし、僞となし、群聖を歷詆して忌憚する所がないと攻擊して居ます。さてその神道說はどう云ふものかと申しますと、翁は一體上つ代の天子樣は內には皇神を御尊崇なされ外には、嚴き御稜威を振起し、伏はぬ國を征し萬民を愛撫し天地に合ひて尊き道を行ひ、天下を治め給ひ、下萬民も亦皇神を崇敬し、心に汚き隈を置きませんで、天子樣を畏み、身に罪も犯さず、朝臣等は皆獻身的に天子樣に仕へしかば、國內能く治つたが、是れが眞の古道であると云ふ風に述べられて居ります。が、どにかくに只今申しました通り淡海野公臺と云ふ人は賀茂翁の神道を攻擊して老聃に類すとし、賀

茂翁自身も叫ふとして居られます。

所が此の賀茂翁の神道を承け繼いで起つた本居宣長翁は自分の道が老子の道とおなじであると云ふのを忌やがつて、決してそうでは無い。老子の道といふのは元來さかしらを厭ふから自然の道を唱へたのである。併し神道はそんなものじやない。若し老子の樣にさかしらを厭うて自然の道を強ひて立てんとするならばそれは自然では無い。若しさかしらならばさかしらがそのまゝ自然じや無いか。かふ云ふ譯で老子の道を非常な小さい道であると云つて排斥しました。尙、神道はそんなさかしらを厭うて自然を立てる道では無くて、神道は神の道のまゝなる道である。神の道に從つて行ふ道である。神の行ひによつて吾々の行ふ道である。よつて老子の自然とは甚しく違ふと云つてひどく老子を攻擊して、さうしてかう云つて居られる。之れをよく辨へて彼の漢國の老子などの言と一つになる思ひまがへそと云はれて居ります。かう云ふ次第で本居翁は、極力老莊を排斥して惟神の大道を說かんと努められました。けれども矢張り反對派は本居翁の說く所は老子の道だと叫んで居ります。たとへば沼田樂水と云ふ人があります。此の人は本居翁の說にひどく反對しましてかゝれば老聃が心と何の別かあると、かう云ふ風に云つて居ります。それから水戸の會澤正志は本居翁の說を駁して其の說の老莊より出でたるを掩はんとしてかく道辭をなしたれども、紙上にて異なると云ふのみにして、實事に施しては分寸の異なることなし。即ち本居翁の道は實際に施せば老子の道だと云つて居る。かう云ふ風で本居翁自身はさうじやないと主張し、反對派はさうであると云つて居ります。

夫れに對して本居翁の歿後に門人となつて熱心に本居翁の道を傳へて居る平田篤胤翁は如何う考へて居られたかと云ふと平田翁は本居翁と反對で我が神道は老子の道と同じで本居翁の老子の自然は眞の自然ではない。實は儒よりも甚しく惡ひたるものであると云はれて居るのを擧げて

叫へりとは聞えずと評し、之れは先生の論だけれども間違つて居ると申し、さうして老子の傳へた玄道の本は我が古代の神聖の彼れに傳へ給へるものであつて我が國の神道に能く一致して居る。此の一致して居る旨は中々支那のことを知らない日本の學者だの、又日本のことを知らない漢學者などには、到底分らんことであると云はれて居る。さう云ふ次第で平田翁の神道は老子によつて居られる所も隨分ありますが、併し老子ばかりでは無い。その他の種々の學説にもよつて居られる。殊に當時の闢學即ち西洋の學問に非常によつて居られるのであります。そこで平田翁の後に出ました六人部是香、大國隆正など申す學者は更に甚しく闢學によられて居ります。それから平田翁と大國隆正との二人を先生にして居つた鈴木重胤、此の人の神道も餘程闢學に基づいて居ります。特別に此の大國隆正の神道などは闢學習合と云ふやうな評を世間から受けて居ります。で、古學神道は多少道教に基づいて居りますけれども併し外の學問の着色も隨分行はれて居ることを記憶しなくてはなりません。是れからの神道家は重もに古學神道の範圍を出でぬのであります。勿論宗教としては、黒住教とか、天理教とか云ふ風な工合に宗教の方面についての神道は、色々發達して來ましたが、神道の學説としては大抵古學神道の範圍を出でないのであります。

マーかう云ふ風に昔から神道の變遷發達の狀況を見ますと大體今まで述べて來ましたやうな徑路を經て居るのでありますが、此の點について一番盛であり、一番よく行はれたのはつまり佛教によつて居るものと最後の古學神道とであります。ところがこの佛教によつた神道は、佛教が非常な勢力を占めて居つたからして盛であつたのであります。であるから佛教が衰へて來ますと、その方面の神道は皆衰へて參りました。所が古學神道は道教やその他の道によるところが有つたにしても、道教やその他の道の盛衰には關せず、依然として盛であります。是れは如何う云ふ譯けである

か。是れは大いに着目すべき點であります。畢竟古學神道と云ふのは、我が國民の精神。始めに申しました我が國民的精神に非常に重きをおいて居ります。此の方面の發揮に全力を盡して居るのであります。されば縱令道教によつて着色する所があつても、關學によつて着色する所があつても、その主とする所はちやんと我が國固有の大道にあつて決して根本を逸しない。他のものは餘りに着色しすぎて殆んど根本を埋沒して居ります。此の古學神道に限つて此の根本を最もよく發揮して居ります。即ち我が國民的精神を最もよく體現して居ります。之れがその鞏固なる勢力を有して居る所以であります。

四十　神道の正しき研究

以上三章に亙りまして私は神道の發展の極大體を述べましたに就きましては尙、茲に聊か述べておかなければならぬことが御座います。今まで述て來ました種々の神道說には非常な缺點があるのであります。その缺點は如何うかと云ふと儒教によつて着色したものは、佛教を非常に排斥する。佛教によつて着色したものは、儒教的神道を排斥する。その他或る一つのものによつて着色しますと他のものを非常に排斥する性質があります。之れが非常な缺點であらうと思ひます。神道と云ふものは先に申した通り日本國民の云爲行動を悉く網羅して居る大道でありまして、丁度度會延佳氏が云つて居ります通り、日本國民の政治と云はず、宗教と云はず、道德と云はず、あらゆる方面の行動を盡く律する所の大いなる道であります。それでありますからさう云ふ大いなる道を示し、さう云ふ大いなる道を發表しやうと云ふのには一方によつて他を排斥するやうな心の狹い仕方では、到底出來ない話であります。此の點に就いては栗田博士の論ぜられた所が誠に適切であるのであります。即ちかう云うて居られます。後世學者狹隘の見を懷き同を合せ異を兼ねる事が出來ないで務めて彼此を立

て藩籬を設け其の學ぶ處に溺れて居る。是れを以つて洋學を主とする者は天祖の遺訓を褻慢し列聖の盛意を奉遵しない。古學を事とする者は或は孔子の教を誹議して神聖の大道に合せずとし、之れを排斥して取らないで以つて異端とするが如きは皆偏心自から小にするの類にして大道の罪人であると。斯う云ふ事を栗田博士が云つて居られますが實に好い說である。さう云ふ工合に他のものを斥けるのは大道の罪人であるとは名言であります。詰り神道は斯う云ふ風なものであつて之れを譬へて見ますと日本古代の國民の間に生れて來た赤坊であります。此の嬰兒が神道の骨髓であります。即ち神道の神髓は古代の國民の間に生れた嬰兒であります。此の赤坊は色々な內外國の思想だの種々樣々の學說だの、さう云ふものを食して養はれたのであります。段々〳〵と養はれさうして今日の樣に大いなる人となつた。即ち今日の神道となつた。赤坊が色々の物を喰べて大人となると同じ樣に色々內外國の說などを喰べて今日の神道となつたのであります。丁度此處に旨い御馳走がある。例へば牛肉があるとそればかり喰べて他の物を棄てゝ仕舞ふ。或一つの自分の好きな物があるとそればかり喰べる。けれ共それればかり喰べても長くは續かぬ。幾ら小豆の御飯が旨いと云つて、小豆飯ばかり喰べて居るとイヤになる。從つて身體の發達を害する。で、色々滋養になる學說思想を取り來るのは、神道を發達さす所以であることが明かであります。今日神道は先きに申しますと通り色々な方面から研究される樣になつて來ました。斯う云ふ工合に神道が社會の種々の方面から研究されて來ましたやうな時代に方りましては十分に之れを歷史的に研究しまして、神道の神道たる所以を捕へて、唯神道は葬式をするものであるとか、神樣の前へ行つて玉串を持つたりする計りだといふ樣な誤解を起さないやうにし、進んで之れが發達を計らなくてはなりません。かう云ふ譯で深く神道を歷史的に研究して人間の身體を生理解剖的に研究する如く、如何なる事がその要素となつて居るかを

明にし、外國の教でも何でも効用のあるものは取つて此の神道の身體を發達さする事を心掛けなくてはなりません。それで神道を斯う云ふ風に研究しますのは一つの學問になるのであります。が神道は元來實踐的のもので、日々に我々が行つて行くものであります。だから純學問ではありません。けれども斯う云ふ風に研究し一種の學問となつて初めて神道は能く我々の精神の智識、感情、意志の各方面の要求に應ずる事が出來るのであります。今日のやうに神道の研究が盛になつて來ますと、中に、色々の說を唱へ、單に一方の智識のみの要求を滿足せんが爲に、神道は太古の神話から成立して居るとか、古代の迷信の遺物だとかいふ樣な不都合な考を有するものが起つて來ます。實に憂ふべきでありませんか。已に神道は實踐的のもので、其の學說は直に實踐に影響するものでありますから、社會に立つて、大勢の國民を敎育して行かうといふ地位に居られる御方、又は國民の指導者の地位に居られる御方は此の點に十分深く注意を拂はれ、神道の神道たる所以を發揮する樣に務められなくてはならないと思ひます。是れ神道は初めより申します通り徹頭徹尾我が國民的精神の結晶でありますからです。

第七章　神道の性質

四十一　師に讓らず

神道の性質は政治の道であるか、宗教であるか、はた道德であるかに就いては已に聊か論じましたが、之れから少し詳しく之れに就いて述べませう。已に以上述べて來ましたやうに歷史的に研究して見ますと神道の性質に就いても色々說が御座いますが、その中でどう云ふ風なのが正しいかを考究すれば神道の性質も自ら明となる次第で御座います。併しそれに就いて少しく御斷りをして置かなければならないのは、以上の如き昔からの說

には多少宜しくない考がある。昔の神道の大家と呼ばれ大人と呼ばれた方々の説でも宜しくない考がある。さういふ考を少しく批評をして見やうと思ふのであります。さういふ昔の大家と言はれ大人と云はるゝ人の説を彼れ是れ申すのは非常に烏滸ケ間敗いやうなことでございますけれども、併し西洋でもアリストテレースといふ人が自分の現在師匠で、二十年間も就いて其の教を蒙つて居つた師匠プラトーンの説を反駁して其の説を彼れ是れいふことに就いて斯う言つて居る。私は師匠のプラトーンは非常に尊んで居る、愛して居る、併し私はもう少し眞理の方を尊んで居る、愛して居る。斯ういふ事を申して始終説の惡るい所を改めて居たのでございます。それから御承知の通りに支那あたりでも孔子は仁に當つては師に讓らずと申して居りますが、日本に於きましても荷田の大人が言はれて居りまするには、師の教なりとてあながちに泥むべからずと云ふ語があり まして幾ら師匠の教でもそれに泥んではいかぬ。拘泥してはいかない。

惡い處はどし〳〵改善して行かなくてはいかないと云ふ考を言はれて居ります。それでありまするから大家の説を彼れ是れ申しても必じも禮を失するといふ譯ではなからうと思ひます。御承知の通り釋迦とか基督とか孔子とかいふ人は萬古の偉人であります。けれども地球は圓形であるとか、或は電車や瓦車が動いて居るがどういふ譯で電車や瓦車が動いて居るかといふことは釋迦や基督や孔子は知らない。吾々は知つて居ります。さういふ議論で以つて釋迦や基督や孔子は吾々よりは餘程馬鹿であると言へば、誰れも其の愚を一笑せぬものはありませぬでございませう。それと同じ事で吾々が大家の説を是非しました所で、それで大家といふ方の價値を輕重する譯ではなからうと思ひます。寧ろ大家とも言はるゝ人は度量廣大でありますから、吾々が斯ういふて道を研究するなれば地下に於いて成程能く道つて居る。十分にやれ。道の爲であるから確つかりやれと褒められて居らるゝと思ひます。それでありますから御同樣に道の爲に

は切瑳琢磨して研究しなければならないことゝ思ひます。さういふ考で是れから少しく昔の人の神道說を論じて行つて見やうと申すのでございます。

四十二　神道に對する異論

さて神道の性質、即ち神道といふものはどういふものであるかといふと、先きに神道の意義の下に大分述べて置きましたが、茲にも聊か方面を變へて述べて見ませう。神道といふものは、政治である、政治の道である、詰り政道である、斯ういふ風の考が昔の一部の學者の間に行はれて居ります。其の最も名高い人は誰れであるかと言ひますると、前に於きましては北畠親房卿、後に於きましては本居宣長翁、此の兩大學者が神道を政治の道と解されたやうであります。親房卿は『神皇實錄』『神皇系圖』『天口事書』など申す所謂三部の書などの說を承けまして天照大神が八坂瓊の勾玉の如くにたへに天の下治しめせ、白銅鏡の如くに分明に山川海原をみそなはせ、この靈劒をとりひさげて、天の下むけたまへと云ふ三句の要道を示されたとして、神道には色々複雜な言も事もあるが、外のものは皆枝葉である。根本は此の三句に基いて天皇の天下を治め給ふ政治の道である。だから此の政治の道が即ち神道である。斯ういふ風の解釋でございます。それから本居翁の考はどうでかるかと申しますと、親房卿と立脚地が違つて居ります。けれども其の結論は同じであります。道を行ふことは君とある人の勤めである、物を學ぶ者の業にはあらずと。斯ういふのが本居翁の說で、道を行ふのは國家の君主たる方の勤めである、物を學ぶ學者杯が行ふものでないと明かに神道といふものを政治道に解釋せられて居ります。

それから其の次にどういふ考があるかといふと、神道は宗教である、斯ういふ風に考へるのでございます。是れは先づ古い考でございまして、御承知の如く、『日本書紀』に用明天皇の下に、天皇佛法を信じ神道を尊ぶとあ

ります。此の神道と云ふ文字を平田篤胤翁は解して神を祭り、神を齋り、又祓などの類凡て神に仕へまつるわざをひろく申したものと解釋されてあり、ますが、誠にその通りで全く神道といふ言葉を宗教的の意味に使つたものと考へられます。それから其の後に已に述べました通り最澄が始めて唱へたと云ふ山王一實神道、或は空海が創めたといふ兩部習合神道、さういふ風の神道は全く宗教的であります。それから後の卜部家の唯一神道、是れも宗教的であります、それから近代の奇傑でありました所の黒住宗忠氏、之れも矢張り天照大神を最上神として明かに一派の宗教を立し、訓誡七ケ條の第一に於いて、神國の人に生れ常に信心なき事を誡め、千辛萬苦して熱烈な宗教的信仰を皷吹されて居ります。近世大分斯ういふ熱烈な宗教家が出られまして神道といふものは宗教である。斯ういふ風に考へる人が澤山出來て來ました。けれども此の神道は全く宗教である、徹頭徹尾宗教であるといふ考も餘り宜い考ではないと思ひます。それから第三番目はどういふ考かといふと神道は即ち德教である、倫理である、神道は倫理でなければならない。斯ういふ說が大分ございます。此の說は今日始つた說ではない。倫理とは昔は多く申しませんでしたが、倫理のやうに考へたのは昔からの說です。彼の山崎闇齋先生、それから平田篤胤翁、あゝいふ方の說の大部分は矢張り此の說に屬するものと思はれます。といふのは山齋崎闇先生は神道は天人唯一にして、道は日神の道、教は猿田彦神の導き玉ふ處、土金の教、天人を貫く、敬みの至りなど申され、その說は牽强附會のやうに思はれます。勿論牽强附會でも何でも兎に角山崎闇齋先生は神道を倫理として、德教として立てゝ行かうといふ考であるのでありました。それから平田篤胤翁は斯ういふ說であります。抑も我が皇神の道の趣きは淸淨を本として、汚穢を惡む、君親には忠實に仕へ、妻子を惠みて、子孫を多く生殖し、親族を睦び和し、朋友には信を專らとし、奴婢を憐れみ、家の榮えん事を思ふぞ、神ながら御傳へ坐せる眞の道なるといふ事が『玉襷』といふ本

に書いてあります。此の考も矢張り今日から申せば倫理であります。勿論山崎先生や、平田翁の説には宗教的方面も少くないのでありますが、その主とする所は倫理であります。他教であります。今日の學者にも國學神道を研究する人には神道は宗教では決してない、神道は倫理である、道德であるといふ説が大變行はれて居ります。其の説はどういふのだと申しますと、神道に説く所は人と人との關係に限られて居る。元來宗教は人と神との關係より成立し、倫理は人と人との關係より成立するものである。神道は全く人と人との關係を説くのであつて、神道で神といふのは決して吾々の頭の上に入らせられる神でない。即ち神といふのは高い所にまします神でない。唯々純粋なる上たる人で、神樣を拜むと云ふも全く倫理的崇拜である。決して宗教的の崇拜でない。斯ういふ解釋であります。でありますけれども吾々が菅原道眞といふ一個の歷史的人物に對して倫理的態度で感謝の意を表し、倫理的御辭儀をするのと、天滿天神として、天滿宮として崇拜するのと、其の間が同一でありませうか。是れは智者を俟たないで分ることであります。さうです、決して同一でないです。で、神道は倫理であるといふ考は少しく誤つて居る考であらうと思はれます。

四十三　吾人の主張

それで以上述べて來ましたやうな見解で神道の性質を示し、神道の性質は斯の如きものであるといふのは、たとひ幾多の眞理を含んで居りましても、偏見たるは免れません。で、私は若し人があつて徹頭徹尾神道は宗教である、神道は倫理である、神道は政治である、斯う申したならばどうしても是れは偏見と言はなければならないのであります。彼の象であります。象とは少し變な例で御座いますが昔から能く申す例で申しますが、盲目の者が集つて象はどういふものであるがといふて撫でる。足の方を撫でた者は象は臼見たやうなものだ。鼻を撫でた者は大蛇大きな蛇見たやうなも

のだ。腹の方を撫でた者は大變ゴッ〳〵塗り方の下手な壁のやうなものだ。と斯ういふ風な解釋をするのであります。どうも前にも述べた學者の說は之れに類似した說ではないかと思はれます。神道と申すものは儒道、佛道その他道と云ふものゝ中で範圍の極めて大きいものであります。平田篤胤翁が『古道大意』で何の學問がイッチ大きいぞと云ふにチト自分勝手のやうなれども、御國即ち我が國の學問程大きなものはないでござると申され、又『入學問答』といふ本に皇國の學問程高大なるものは無しと言はれて居ります。其の通りで神道は範圍の大きなもので中々百千萬の象どころではありません。でたとひ一代の大學者でも、時勢、境遇或は時代の知識の程度と云ふものを脫することは出來ません。如何に大學者でも時代の知識より拔け出ることは出來ません。時代の最高の知識を集めた人がその時代の大學者で、それより以上に飛出すことは出來ません。かういふ時勢、境遇、時代の知識と云ふ雲が掛つて居るものですから、たとひ大學者でもかくも廣大なる神道はすつかり見ることが出來ないのであります。所が今日は明治の大御世になりまして文物粲然として發達して來ましたものですから、時勢、境遇も急速に變化し、時代の知識の程度も非常に進んで來て參りました。昔の北畠親房、一條兼良、山崎闇齋、本居宣長等の大先生だちの時代とは大變知識の程度が進んで參りました。普通の人でも其の當時の豪らい人位の知識は持つて居ると云ふやうに今日は大變知識の程度が發達して來ました。斯ういふ發達して來た所の知識、之れを基礎として研究して見ますならば、比較的正確な判斷を得られます。さう云ふ判斷で見ますと神道は政治である、道德である、宗敎であるなどいふ風な一の見解を與へるのは前世紀の議論と言つて宜からうと思ふのでございます。

四十四　神道の典據

抑も此の神道の典據は何處にあるかと考へて見ますると神道の典據は

『古語拾遺』に、蓋し聞く、上古の世、未だ文字あらず、貴賤老少口々に相傳へ、前言往行存して忘れずとあります通り、忘れない我が國民が、實に記憶力に最も富んで居る我が國民が、忘れないで傳へて來た傳說でございます。其の傳說は『古事記』とか『日本書紀』とかいふ本になりまして確實に傳はつて來たので、勿論斯ういふ傳說は外國ではミス(myth)又はミソロヂー(mythology)といふ言葉で以つて示して繁簡精粗はありますが、大抵の國には之れが存在して居ります。此の傳說は當時のあらゆる文化の精華を集めたものであります。即ち其の當時のシビリゼーションの要點を悉くミスの中に包含して居つたものと云はるゝのであります。で、今日の心理學者の說に依つて見ますと人間の精神活動には知識・感情・意志といふものがあります。此の三者は別々にあるのではなくて、詰り精神活動が智的・情的・意志的の三方面を有して居るのであります。從つて世の文化なるものは亦此の三大方面に別つことが出來ます。されば傳說の中にある上古の文化を知的系統

情的系統・意志的系統、斯ういふ風の三つに別つ事が出來ます。それで知的方面は何であるかと云へば政治的系統であります。情的方面は宗教的系統であります。意志的方面は道德的系統でございます。從つて當時の文化の精華を包含して居る所の傳說には此の三大系統が皆含まれて居るのであります。然るに外國では民族が始終集つたり散つたり所謂集散離合をやりまして、國家が興つたり亡びたり所謂興亡存滅を常にやつて居ります。其の他種々の事情がありましたる爲に傳說は殆んど消えて仕舞つて、後の學者が考へた政治・道德・宗教といふものが、すつかり之れに代つて今日廣く行はれる樣になつて來ました。所が我が國は外國とは其の趣が違つて、當時の大政治家で、大宗教家で、大道德家でありました所の神々の子孫は、君主として長へに此の國に臨まれ、其の神々の支族或は末族のものは長へに臣民として君主に仕へる。斯ういふ國體であります。ですから人種が變はりませぬ。國體が變りませぬ。外國のやうに人種が集散離合し、國家

が興亡存滅することは曾て無いのであります。それでありますからして、傳說、それが生きて居りまして長へに民族の上に勢力を持つて居るのであります。で、此の民族といふものゝ固有の道德でも政治でも宗敎でも悉く此の傳說から發達して來たのでございます。それを名付けて吾々は神道と申すのであります。神道はかゝる性質を持つて居るものであります。ですからして政治的思想に富んで居るものが見ますれば神道は政治であると解し、非常に宗敎的感情の熱烈なる人から見ますると神道は宗敎であるとし、盛に宗敎として、之れを唱道するのであります。道德的意志に偏した人から見ますれば神道は道德である、何處迄も倫理であるといふのであります。斯ういふ說は皆眞理を含んで居りますが、皆、偏見、斯ういふことが出來るのであります。

四十五　神道に於ける三方面の說明

で、其の理由を更に深く考へて見ますと、我が國に於きましては前申しましたる通り上古には「神居帝座其の殿を興にし、君と神と一體にして、祭祀國政相分れず」と云ふ有樣でありまして、神と君と一體、祭と政と不二なのであります。そこで親房卿が神道を神國政治の要道であると解釋されたも尤もの次第であります。或は本居翁が道は天皇の天下を治めさせ給ふ正大公共の道なるを一己の私のものにして自ら狹く說きなしてたゝ巫覡などの業の如く、或は怪しき業を行ひなどして、それを神道となのるのはいとも〳〵淺ましくかなしきことなりと言つて居られるのは尤もの次第であります。即ち道は天皇が天下を治めさせ給ふ正大公共の道とは先に申しました翁の語も歸する所同一で一己の私のものでない。天下の政道であるといふのが翁の說であります。翁は即ち神道を政治の道と解せられたのであります。けれども之れが決して誤りでないのであります。それから其の次に我が神典に傳つて居ります通りに、天照大神が寶鏡を授け給ひ

し時の神勅及び高皇產靈尊の「あまつひもろぎ」「あまついはさか」の神勅の如き、其の他祭祀が行はれ、或は禊とか祓とか神樂とか色々昔から行はれた儀式です。斯ういふ風な儀式を研究して見ますとどうしても宗教的儀式、即ち吾々民族の宗教的感情の發表としか見られない。それでありますから、して黑住宗忠氏の如く或は井上正鐵氏の如くあゝいふ風な熱烈な宗教心の強い人であると、どうしても神道は宗教に見えるのであります。實際神道なる文字は用明天皇時代に佛法と相對して用ひられてあつたのであります。で、神道の性質は宗教であると言つて尤ものことであります。それから山崎闇齋先生や平田篤胤翁やその他今日でも道德的方面を重んずる學者は、神道は全く道德であると解するのであります。成程さういふ眼を以つて見ると古傳の傳へまする神々の行爲は一々我々の日常の行爲の規範を示されたものと解せられ、それから又此の神道に行ひまする崇拜です。神樣を拜むのです。之れも道德的方面の人が見ますと、唯々本に報い始に

反る所以である。斯ういふ風に神道は道德であると眼に映じて來るのでございませう。コー云ふ次第でありますから神道は、道德である、倫理であるといふのは誤りでないのでございます。が併し之れは先に申しますやうに象を撫でゝ曰のやうなものである、蛇のやうなものである、壁のやうなものである。斯う申したのも間違ひでないのと同じでありまして、斯う申したのが間違ひとは斷言せられないのであります。實際或る所は蛇のやうであります、或る所は曰のやうであります、或る所は壁のやうであるからであります。決して間違ひではありません。けれども其の考はどうも部分的であつて偏見と言はなければなりませぬ。それで明治の昭代、かくも盛に發達して來た其の學問を應用してさうして此の神道といふものを研究して見ますと、どうしても此の神道といふものは、その起源から見ましても、その典據から見ましても神道の性質は政治・宗教・道德といふ三大系統が即ち三大要素を成して居るやうに思はるゝのであります。勿論斯う

いふ風の考は昔にも多少あつたのであります。彼の外宮の權禰宜でございました度會延佳神主などもその一人であります。あの方は後世から非常に非難されました。學說に對しても、人物に對しても、非難されました。けれども非難の多い丈け卓見もあります。氏は前に述べました通り吾々と同樣の考を有されて居りました。その思想を度會淸在と申す學者が『陽復記衍義』と云ふ本に說明して居ります。どういふ說であるかといふと今や神道者と云ふ名があるものだから其の人だちも我れこそ神道者なりと臂を怒らし揚々として騷ぎ廻つて居るけれども、此の位可笑しい事はない。此の國に生れて此の國の著物を著、此の國の食を喰つて生活をして居りながら、上に君や父を頂き下に妻子臣僕を帶びて、父子親を行ひ、君臣義を行ひ、夫婦別を行ひ、或は序を行ひ、或は信を行ふ。斯ういふ風に國民が行ふならば、此の國民は悉く神道者である。何も神道者といふものが別にあるものでない。此の道を行つて行くなれば國民全體が神主である。之れが即ち左を左とし右を右とするのである。ちよとこの左左右右とは『神道五部書』に書いてあつて、左と右と交換しないやうに、ゴチャ〳〵にしないやうに、正しくせよと云ふ語であります。で、かくするのは左を左とし右を右とするの道であつて天御中主尊・天照大神が此の御國を定められてより此の方連綿と絶えない神道である。神主が神事を行ふのみを以つて神道であるといふからして神道は極めて變てこなものになつて來た。斯ういふのが度會淸在と申す學者の『陽復記衍義』に書いてあるのでございますが、此の外度會氏の說を能く考へて見ますと、詰り神道は宗敎で、同時に倫理である。斯ういふ風な解釋と思はれますが、併し私は政治に從事して國家の政を行ふには勿論道德もなければいかぬ。政治も道德を離れては政治の價値が無い、それで道德と政治は離れることは出來ない。けれ共私は政治家は政治家として別に政治的活動として特殊の活動をなすものとして、人類社會の現象には、宗敎・道德と相對した政治と云ふものゝ存在を認め、さつきから述

べて來ましたやうに神道は政治・宗教・道德を以つて其の主要なる內容を組織する要素だと考へるのであります。で、我が帝國が御承知の通り世界無比の國體を有し、萬世一系の皇統を戴いて、さうして建國以來國威が益揚り、國光が益輝いて行く、此の所以はどういふ譯であるかと考へまするに、或る人は斯う言ひます。それは昔此の國が野蠻未開の時代であつたので極めて獸的な行ひをして居つた所が儒教といふ立派な教が這入つて、五倫五常の道を教へ、さうして無比の國體を有することが出來たのであると申して居る學者がある。又、或人は佛教が傳はつて來たからであると申します。で、つまり儒教や佛教の御蔭である。斯ういふ論者がございます。併し儒教の本國はどうであるか。常にダイナスチー (Dynasty) を變へるではありませんか。革命の國ではありませんか。佛教の本國も其の通りです。我が日本の國體が世界無比で、我が日本の皇統が萬世一系でありますのは、實に我が國固有の大道が、單に政道でなく、單に宗教でなく、單に道德でなく、詰り神道其ものゝ中には政治も宗教も道德もあるのでありますからです。已に神道は單に政治でなく、單に宗教でなく、單に道德でない。それでありますからして儒教が渡つて來る、さうすると堯舜の禪讓や或は湯武の放伐の如きを極力排斥し、又佛教が渡つて來ましても、小乘佛教の極めて消極的で極めて厭世的であるものは直に其の跡を絕たしめ、能く積極的で、現世的なる大乘佛教を利用し得たのであります。

四十六　外教の利用

が、併し利用であります。物を利用しやうとしますと利用するその物から多少影響を受けまするのは免れ難いものであります。その影響を受けますのは物質的方面でも精神的方面でも同じであります。殊に宗教などには之れが著しいので、昔の英勇豪傑など初めは宗教を利用する考で遂にその宗教に呑み込まれて一身を捧げた例は少くないのであります。つま

り宗教を利用しやうと思つて餘程影響を受けて居るのであります。それで儒教佛教が渡つてから我が國の神道は、即ち我が國固有の思想は大變影響を受けました。併し影響は受けましたけれども儒教佛教なりは一概にも云へませんが、一般には大變に都合よく出來て居る。丁度從順な嫁見たやうなものであります。從順な嫁でありますからして、嫁に來まするとその處の内の家風にちやんと同化して仕舞ふ。其の家風を守るやうになつた。之れが儒教佛教の我が國に於ける功績である。然るに維新以來外國と緣組を始めて來た。西洋文明の嫁を貰ふやうになつた。所が西洋の文明は女尊男卑と云ふ風な國柄に育つた嫁であるから我儘だ。であるから吾々は我々の子孫に我が國固有の大道を以つて十分に教育して其の精神を十分に堅固にして我が儘の嫁の爲に自由にされないやうにしなくてはならない。吾々はどうしても此の我儘な嫁を十分に利用し、此の嫁の主人たるやうに子孫を教育して行かなければならないと思ふ。さうしませぬと所

謂牝鷄の晨を告げるやうになる。そこで吾々は吾々の子孫を固有の思想で教育して行かなければならぬと絶叫するのであります。

實際維新後西洋の文明が沛然として我が國に這入つて來ましてから以來、隨分西洋の思想に心醉致しまして彼れに習ひ我が固有の大道を忘却して居るものが少くない。諸君が新聞で御承知の如くいつぞやも神田の錦輝館の前で社會主義のものが大騒ぎをした。あゝいふ風の考はどういうものであるか。詰りあゝいふ風の考は西洋の文明に心醉し、西洋の文明を丸呑みにし、西洋の嫁を貰つて嫁の爲に自由にされて居る、斯ういふて宜しいと思ふ。我が今上天皇陛下恐れ多くも夙に斯ういふ風の傾向を御覽遊ばしてかの教育に關する勅語を發布されたのであります。其の御主意を拜察致しまするに、教育といふものは徒らに外國の眞似をして、外國の倫理道德宗教といふものを以つて教育してはいけない。どうしても我が國の皇祖皇宗の遺訓に從つて教育して行かなければならない。斯う仰せられ

たのであります。陛下が仰せらるゝ皇祖皇宗は、即ち吾々が常にいふ神様であります。それで陛下が皇祖皇宗の遺訓と仰せられたのは、即ち神々の遺訓で、神の訓へ、即ち神の道といふことになる。それでありますからしてどうしても我が國の子孫を教育するには神の道に依つて教育して行かなければいかぬぞよと仰せられたのであらうと拜察致します。

四十七　神道の本質

それで私は斯ういふ結論に到着して來るのでございます。神道といふものは、政治・宗教・道德、此の三大要素と、此の三大要素を遺憾なく發展さして行かうといふ教育と云ふものを含んで居ます。即ち崇神天皇が民を導くの本は教化にありと仰せられましたる教化、即ち教育を含んで居ます。此の四大系統、政治・宗教・道德・教育此の四大系統は即ち神道を成すものであらうと思ひます。斯ういふ風に神道と云ふものは廣大なものである。至極廣大なものでありますからして、吾々は神様でないので、吾々は四大系統を悉く十分に行つて行くことは出來ない。今日のやうに文明が複雜になつた社會に立ち此れ等を十分に行ふことは吾々には出來ない。それで政治的傾向を持つて居るものは此の我が國固有の大道を體認して政治に參與しなければならぬ。宗教家傾向を持つて生れたものは此の我が國固有の大道を體認して宗教を唱へなければならぬ。道德的傾向を以つて生れたものは我が國固有の大道を以つて道德を我が國民に鼓吹しなければならぬのであります。で、我が國の政治家・宗教家・道德家・教育家此の四つの者は丁度四本脚の机が四本の脚で立つて、さうして物を載せて居りまするやうに、政治家も宗教家も道德家も教育家も共同一致して、此の我が國固有の大道といふものを以つて聯絡を取り、互に共同一致して我が國家の意志を發展して、吾々の天職といふものを完うしなければならぬのであります。即ち是れは丁度四脚の机が四本の脚から物を載せて居るやうなものである

と思ひます。さういう風にして始めて吾々は皇室に對して忠に、父母に對して孝となつて、さうして吾々終局の理想を實現して行くことが出來るだろうと思ひます。神道の本質は實にかゝるものであります。

第八章　帝國の大道

四十八　神道は帝國の大道

神道の性質を明かにすれば神道の本義は、又自ら明になるべきであります。が茲には神道は帝國の大道たる所以を說き以つてその本義を明かにすることゝ致しませう。

抑も我が國が上下三千年、東海の表に國を爲して以來、少しの土地も外國の爲に侵されず、實に眞正なる意義に於ける所の金甌無缺の帝國と云ふものを維持して來て、且つ以つて益々發展して行くと云ふ其の所以は何處にありますでせうか。試みに地球儀に就いて見ます。試みに世界の地圖に就いて見ます。世界に多くの國の羅列して居る事と云ふものは實に數ふるに遑なき程であります。斯う云ふ世界の各國がです。太古からして今日に至る迄果して同じ現今の狀態を維持して來たものでありませうか。是れが維持して來たものでない事は誰れにでも解りませう。若し是れが太古から此の儘遺つて來て居るものであると云ふものでありましたならば、少し其の者に反問して見れば分ります。昔、彼斯の二百萬の軍隊を引受けて戰爭した所の雅典、スパルタの國は今日は何處に在るか。或は又世界を征服せんとした所のアレキサンドル大王の領圖は今日何處にあるか。或は又地中海を自分の家の如くに考へて居つた所の羅馬帝國は今日何處にあるかと。勿論斯う云ふ國家の占めて居つた所の土地は依然として遺つて居るけれども、其の國家其のものは既に亡びて二千年。昔の夢となつて居るではありませぬか。斯くの如く國家は常に盛衰興亡して來て居る。

國家が斯く盛衰興亡して來て居るのは何う云ふ譯であるか。

凡そ生きて居る物は何でも生存競爭して居るのであります。例へば其處に蟬が一匹啼いて居るとしますと、それを雀が行つて取らうとして居る、其の蟬を取らうとして居る雀を鷹が取らうとして居る。すると又其の雀を取らうとして居る鷹を獵師が取らうとして居る。斯う云ふ樣な工合に此の世に生きとし生ける物は總べて生存競爭をして居る。且つ此の生存競爭は生きとし生ける物の中に最も高等なる所の人類に於いても絶えないのである。けれども此の人類の生存競爭と云ふものは上に國家と云ふものがありますからして、其の生存競爭は太古の野蠻的の如く、或は下等動物の樣な野蠻的の競爭はしない。極めて高等なる競爭をして居るのである。併し此の國家其のものになつて來ると云ふと、上に制するものが無いので萬國公法などと云ふものがあつても其の勢力は極めて微弱である。一度權力の平均を失したらなば其の勢力は極めて微弱である。さう云ふ工合であるからして國家と國家との生存競爭と云ふものは極めて激烈である。極めて慘酷である。昔から斯う云ふ風に國家と國家とは互ひに生存競爭をして居つた。而かも極めて慘酷なる極めて劇烈なる生存競爭をやつて來たのであります。それでありまするからして世界の各國が興亡實に限りが無いのである。實に修羅的の競爭と云つて宜い。斯う云ふ樣な修羅的の劇烈なる競爭をやつて來て居る所の國家の中に介在して我が此の大日本帝國は、三千年の間少しも土地を外國に奪はれもしない、所謂金甌無缺の帝國を維持して來たと云ふのは何う云ふ譯でありませうか。是れが一大疑問である。私が此の疑問を解決するには是れは詰り我が國には古來我が國固有の大道が行はれて居るからである。此の一言を以つてするのであります。勿論地理的關係や、その他種々の關係もありましたでしやうけれどその歸する所は詰り世界の各國に於いて絶えて見る事の出來ない所の固有の大道が行はれて居るからして、それで世界の各國に絶え

て見る事の出來ない金甌無缺の帝國を維持し且つ發展して行くのであると、斯う私は信ずるのでございます。

然るに此の大道と申しますものは何う云ふ物に表はしてあるか、斯う申すと云ふと、或は基督教のバイブルとか或は佛教の經典とか或は儒教の四書五經の如くに其の道を書き記したものは少しも無いのである。無いものでありますからして世間の人は、佛教が入つて來る、儒教が入つて來る、基督教が入つて來る、直ちに是れは立派な教であると云ふて其の方に向ふ。さうして我が國固有の大道ある事を忘れて仕舞ふのであります。勿論學問をした事のない何も知らない無智の人間がさう云ふものに向つて走つて行くのは止むを得ぬとしましても、學者が少なくとも我が國體、我が大道と云ふものに就いて多少智識を有して居る所の者迄が其の方に向つて走つて行くと云ふのは、實に其の愚憐むべきであります。斯く云ふ憐むべき學者、憐れむべき人物と云ふものは今日計りではない昔からあるのです。

私は是れに就いて最も適當なる一人の代表的の人物を茲に擧げて見やうと思ふ。それは誰れであるかと申しますれば、彼の遠江の國に出られたる賀茂眞淵翁の門人の一人、縣居門四天王の隨一と稱へられたる村田春海其の人であります。此の人は何う申して居りましたか。彼の言葉に、我が國の道とする所のものは周公孔子の道である。周公孔子の道を含いて別に道を我が太古に取る。吾れ未だ之れを聞かざるなり。吾れは未だ斯う云ふ事を聞いた事はない。それであるからして和字は我が字ではない、漢字を借りて我が音に充てたのである。衣服冠冕——此の着て居る所の着物や冠は皆唐の制度である。百官有司皆唐の制を學んで居る。今日ならば西洋の制を學ぶと云ふのでせう。律だの令だの格だの式だの是れ皆唐の制を學んだのである。博士は明經・文章・天文・陰陽それから律・算・音・諸科の博士がある。併し和學博士とか歌學博士、即ち我が日本の學問の博士、日本の歌の學問の博士と云ふものは無い。勿論和歌博士と云ふ事があつたけれど

も、是れは大江匡房が戯れに云つたので和歌博士が實際あつたのではない。和學歌學と云ふものは古へは無いのである。和學者と云ふ者は何う云ふものであるかと云ふと、儒者であつて本朝の典故だの言葉だのに達して居るのが和學者である。又、歌學者と云ふのは儒者にして歌を作る者である。吾が僧ら……春海自身が云ふのです……吾が僧ら腐陋と雖も儒者である。即ち儒者にして歌を作つて居るものである。斯くの如く本朝の制度文物皆既に周公孔子の遺法を奉じて居る。さうして又佛教を信ずる者が一方に多い。一體此の日本に於いては若い時には儒教を信じ、年を取つては佛教を信ずると云ふのが中古以來一般の風習である。之れに依つて考へて見ると云ふと儒にあらざれば即ち佛である。此の二つの道を除いて道と云ふものは無いのである。此の二つの道を除いて別に道を立てると云ふ事は吾れ未だ之れを聽かないのである。かう云ふのが村田春海の道に對する議論である。彼は眞淵翁門下四天王の一人である。さうして其の議論

は實に斯くの如くであるのです。詰り村田春海の如きは我が國の大道を知るべき地位に在り乍ら徒らに外の方に向つて求めて、内に大道のある事に氣が附かなかつた人である。併し獨り是れは春海計りではない。昔から斯う云ふ人が大分あつたのです。山崎闇齋先生の門下の淺見綱齋とか佐藤直方とか云ふ樣な人も矢張山崎闇齋先生が神道を奉じたら去つて仕舞つたと云ふ事である。詰り是れなども我が國に固有の大道のあつた事を知らなかつた人と云はなければならない。勿論山崎闇齋先生には多少の批難は免れない。率强附會な所のないではないけれども、是れは猶克く研究すべきである。然るに彼れ佐藤淺見の輩らは其處に氣が附かないのである。徒らに外に向つて道を求めて居るのである。昔は自分の頭を無くして、ハテ頭か無くなつた何處へ行つたらうと大騒をした揚句やう〳〵頸の上にあつたのに氣が附いたと云ふ狼狽者があつたと云ふ事でありますが、私は此の譬喩が村田春海一流の人物に最も適切なるものであらうと

思ひます。實に我が國に大道の存在する事は恰も天に日輪の懸かつて居るが如きもので、斯くの如く明らかで、斯くの如く明皇々たる大道が存在して居るのに、是れには一向氣が附かずして徒らに外に求めると云ふのは、猶自分の頭が無くなつたと云つて騒いで居るのと同じ事だらうと思ふのです。平田篤胤翁の父上は篤胤翁に向つて、若し孔子が日本の國に生れたならば決して儒教は説かないで我が神道を説いたに違ひない。我が國固有の大道を説いたに違ひない。それ故に其の方も此の方面に向つて研究しろと云ふ事を教へられたと云ふ事である。成る程さうであらうと思ふ。若し孟子が――支那の孟子が我が國に來て見ましたならば、村田春海一流の人物を評して所謂喬木を下つて幽谷に入る者とは是れ等の事であるかと云ふであらうと思ふ。高い所の地位を下つて態々薄暗い谷底に入る者とは是れ等の事だらうと孟子は笑つたに相違ない。けれども吾々日本民族に於いては斯くの如き輩を默過して笑つて濟ます譯には行かぬ。何うしても斯う云ふ連中から先づ以つて我が帝國の大道の存在を明らかにさせないと我が將來の國家を如何せんと斯う私は信ずるのであります。

斯う述べて來ますると云ふと、讀者諸君の中には、みんな大道と云ふものがあると云ふ事は未だ克く聞かないが一體其の大道と云ふのは何んなものであるか、我が帝國の大道とは何んなものであるか。斯う云ふ質問が出て來ます。私は此の質問に對しては神の道である。と斯う答へる。世に神道と申して居る神の道である。神の道である。私が斯樣に申しまする、或は諸君の中に斯う云ふ考を抱かれる方があるかも知れない。日本の固有の大道は神の道である。神道であると云つたが、それならば例の神社の前で手を拍いたり或は祝詞を讀んだり玉串を上げたりするのが大道であるか。そんな大道なればとつくに知つて居る。そんな大道なれば信仰しなくとも宜い。又そんな事のために態々勿體らしく下らぬ話をして貰はぬでも宜い。そんな事なら止して貰はふと。斯う云ふ樣な御考を持た

れる方もあるかも知れぬ。併し是れは大變な誤解で、毫釐の差之れを千里に失すと昔から云つて居ります。譬へて見ればかの停車場に於いて少しも東西南北を知らない所の老爺さん老婆さんが滊車に乘るとする。若し東へ行く積りで一歩過つて西行線の列車に乘つたら何うでありませうか。唯、乘る時の一歩の誤りである。然るに其の翌日に於いては何うであるかと云ふと自分の目的地とはまるで反對な、自分の目的地とは數百里を隔つた方角に行く樣になつて居る。唯、初の一歩の違ひから、初の少しの考へ違ひで斯くの如き差が出來るのである。毫釐の差之れを千里に失すとは此處である。私は此の問題に就いては屢に申しましたる度會延佳氏の管見の說を反復したいのであります。即ち延佳氏は玉串を持ち神語を唱へたりする事などは、祭庭――祭りの庭の儀式であるが、是れも亦神道の一事にして最も重しとする所である。即ち神道の最も重大なる一部である。けれども此の事ばかりを神道と思ふのは天を管から覗いて見た樣なものであると主張するのであります。

四十九　神道の說明

で、己に申しました通り神道と云ふ者は極めて宏大なものであります。それでは其の神道は何んなものであるか。もう少し十分な說明をして貰ひたい。斯う云ふ問題が起るであらう。そこで神道は神の道である。それでありますからして之れを十分に說くには先づ神と道との兩方面から說いて行かなければならぬ。でありますけれども、之れを十分に說くには大變な問題になつて來ますから、茲では簡單に申しますが、此の神と云ふものに就いて、神とは何ぞや神の觀念は如何と云ふ。此の問題に就いては昔から色々の學者が色々に頭を惱めて居るのでございます。

五十　神の觀念

是れに就いては玉木葦齋と云ふ人の説がある。是れは山崎闇齋先生の所謂神道を説いたのでありますけれども、其の神に就いての説は極めて穩健であると思ふ。是れは新井白石とか伊勢貞丈とか云ふ人々と同じ意見である。それは何う云ふ意見かと申しますると、神の訓即ち讀み方を、鏡の訓かゞみのかを取つてかみとしたのであるとも云ひ、或はかんが見るをつゞめてかみとしたのであるとも云ひ、或はあかきみゆると云ふのがつゞまつてかみとなつたのであるとも云ひ、言語の方面から解釋を付ける人があるけれども是れは何うも面白くない。詰り神と云ふのは神の尊くおはして何とも名け奉るものがないのである。たゞ嚴き尚めて上と云ふかみである。上が即ち神で上と神とは同一である。斯う云ふ風な見解である。何うも此の神と云ふ言葉が上と云ふ言葉から來たと云ふのが多くの學者の唱ふる所である。併し純粹に上と云ふばかりでなくして、それともう一つ尊常でない一種靈妙であると云ふ考へが其の中に入つて居るのである。

是れに就いては本居宣長翁の言葉に、凡べて神とは古への御文等に見えたる大地の諸々の神達を始めて、それを祠れる社にまします御靈をも申し、又人は更にも云はず、鳥でも獸でも草でも木でも、海でも山でも何でもかでも尋常でない優れた德のある所のものは皆神である。本居宣長翁は斯う云つて居る。それから又平田篤胤翁は、神はかびと同じ事であるかびのかは彼の意にて物をそれと指て云ふことで、びは靈妙なるものを云ふ語である。即ち神は尊くして侵すべからざる一種靈妙なるものである。是れが平田翁の説である。其の門人の鈴木重胤翁、此の人も同じやうな説を唱へて居る。斯う云ふ樣な説は凡べて神道學者の間に信ぜられて居るのでございます。兎に角神と云ふものは、吾々が唯之れを概括して云へば、神と云ふのは上と云ふかみの觀念と、靈妙と云ふ觀念とそれからして優れて居るシュピリオルと云ふ觀念、照臨と云ふ觀念、斯う云ふ特性、斯う云ふアットリビュートを持つて居る所のものが神であると、かう私ほ信ずるのである。それ

で兎に角今日あらびと神などと申しまして今日現存して居る所の人でも神と云ふ事は出來るのである。それから過去に於いて吾々の祖先の内今云つた樣な特性の内の一つなり二つなり或は悉く持つて居る樣なものを神と云ふのである。それであるからして西洋で唯一神と唱へて居るあゝ云ふアブストラクトの樣な神でなくして、即ち詩人や哲學者や宗教家が勝手に造り出したのでなくして、日本の神は人格を備へて居る所の神である。餘程西洋とは神の考が違つて居るのであります。で、斯う云ふ神の行はれた事、云はれた事が道となつて、所謂神の道となるのである。勿論優勝である優れて居ると云ふ其の優れ方には程度があります。デグリーがあります。コンパラチーヴであります。（神の觀念に就いては拙著『平田篤胤之哲學』に詳述せり）

五十一　神の道

此の唯一上と云ふ内にも色々上下がある。一國の君主もあるし、或は又一縣の長官もある。一郡の長もあれば、一市一村の長もある。或は又一部落の長もある。是れ皆上である。神である。一部落の長でも上であるし一軒の家に就いても其の家の主人は上である。其の又主人の妻は御上さんである。お上さんも一つの優れて居る所の神の特性を持つて居る。唯其のデグリーが低いのです。程度が低いのです。それであるからしてお上さんの言葉、或はお上さんの行つた事は一家の御自分以下の者に影響を及ぼして行きますけれども、それ以上には中々及ぼさない。是に反して一國の最も豪い者、例へば柿本人麿公とか、和氣の清麿公、菅原道眞公、楠正成公、德川家康公だとか云ふ人々になると大變なデグリー、非常な程度の優越なる地位を持つて居る神である。かう云ふ神が尊い神であるので、吾々が彼の人麿神社に詣つては人麿公の歌を詠つた樣に、眞のまこの歌を詠つた樣に、自分もやりたい、あゝ云ふ人になりたいと思ふ。又彼の護王神社へ詣つて

は和氣の清麿公が忠誠を盡した如く吾々も君國に對して忠誠を盡したいと思ふ。又天滿宮に詣つては菅原道眞公の如く君國に盡したいと思ひ、湊川神社に詣つては正成公の如く忠勤を勵みたいと思ふ。或は又東照宮に詣つては德川家康公の「人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し」と教を垂れられた事を思ひ起して其の人を追慕する。勿論此の遺訓は家康公が云つたものか何うかと云ふ事は歷史家の問題であるが、少なくとも德川家康公は之れを自身に實行した所の人物であると思ふ。此の實行が即ち吾々の模範になるのである。是れが爲に吾々は東照宮の東照宮として尊き所以を見るのであります。つまりかう云ふ風な事が皆神道の一部分を爲して居るのであります。それで德川家康公がさう云ふ樣な事をし、或は又楠正成公が湊川に戰死するに當つて七たび生れて君國に報ずると云つた。さう云ふ樣な事、或は又菅原道眞公が遺訓に國學の要とする所は和魂漢才(コンカンサイ)にありと云ひ、其の他忠孝一致の道を說いて居る。此の和魂漢才の

語も後人の附會と申しますが、とに角道眞公一代の事蹟はかゝる語で能く示さるゝのであります。かゝる道眞公の說いたもの、行つた事、是れ等は皆吾々の日常行爲の好模範となる所のものである。そして是れが又神道の一部分を爲すのである。或は又和氣の清麿公が彼の勢ひ天皇を凌ぎ奉つた惡僧道鏡の威嚇を恐れず、宇佐八幡宮の神託なりとて、我が國家は開闢以來君臣の分が定まつて居つて未だ臣を以つて君とした例しが無い。天つ日嗣は必ず皇緒を立てよ。若し天位を窺窬する無道の者があつたならば速かに之れを除いて處するに嚴罰を以つてせよと憚る所なく道鏡の前に直言した事などは最も神道の眞髓で是れ亦其の一部分である。其の他楠本人麿公の歌の能く示せる彼の眞心と云ふ者が神道の根抵となつて居るのであつて、是れ等は全く神道を事實の上に示した所のものである。神道には別に經典が無い、バイブルが無いけれどもかう云ふ事實が一々存在して居るのであります。かう云ふと或る人はかう云ふでありませう。君の

云ふのは成程事實かも知れない。けれども外國にもさう云ふ例は幾らもある。伯夷叔齊の如きは武王の紂を討つに臨んで馬を叩いて諫めて臣として君を伐つ忠と云ふべきかと、かう云つて諫めた。又遂に周が天下を取つて仕舞つてからは首陽山に隱れ周の粟を食はずと云つて蕨を食つて居つたが遂に餓死して仕舞つた。或は又レオニダス、是れはスパルタの王であるが僅に三千計りの兵を率ゐてペルシャ二百萬の侵入軍を支へて、遂にスパルタ雅典の國家を全うしたではないか。さうして自分の身體は國家のために犧牲にしたではないか。是れ等は皆君の云ふ神道と同じではないか。又ネルソンと云ふ人は何うであるか。ナポレオンが彼の隆々たる勢ひを以つて佛蘭西の主權者となり、佛蘭西・西班牙の聯合艦隊を以つて英吉利を一擧に取ひしがうと掛つた時に、ネルソンは之れをトラファルガーの一戰で打破つた。其の破り方が一樣でない。彼れは先づ戰の初に當つて將士に訓令して何と云つたか即ち英吉利の軍艦は……英吉利の海軍は如何なる場合に於いても人道を重んじなければならぬ。一度び敵が白旗を掲げたならば之れに發砲しては可かぬと云ふ事を嚴命した。而して其の例を自ら示さんが爲に敵の旗艦が白旗を掲げて進んで來たので、其の發砲を止めた所が、豈に圖らんや敵はネルソンを狙擊したのである。其の狙擊の一彈にネルソンは斃れたのである。詰り彼れの所謂人道を重んじて彼れの所謂人道の犧牲になつたのであります。外國にも斯う云ふ立派な人を見出す事が出來るではないかと云ふ問題が起る。それは成程立派である。立派ではあるけれども私は此の行ひの精神、行ひの根本と云ふものが我が國の人の行つた根本の精神とは大變に違つて居ると思ふのである。又我が國にも隨分惡い者が少なくなかつた。けれども支那の樣に萬乘の君主を放伐して自ら君主となると云ふ樣な所謂湯武の放伐と云ふ樣な事は無いのである。王莽が漢の皇位を奪ひ、或は魏の曹孫が後漢の皇位を脅し、或は又西洋で云へばピピンがフランク國を奪つてフランクの王位に即

いた事、或は又ナポレオンが一法律學者の息子を以つて佛蘭西全國の帝王となつた事、斯う云ふ樣な事は日本には無いのである。殊にです、最も甚だしいのは西紀一千七百九十二年に於ける佛蘭西の國會の態度であるのです。此の西紀一千七百九十二年の佛蘭西國會に於いては何うでありましたか。國王を數ヶ月間も牢獄の中へ入れて置いて、さうして遂に之れを國會の前に引出して來て是より此の國王が有罪であるか無罪であるかを決し、有罪であるとしたならば其の所罰を國民に諮るべきや否やを決し、而して其の所罰法は如何なる刑罰を之れに加ふべきかを議會に於いて諮つたのであります。所が其の議會に於いては……佛蘭西の國會に於いては、國王は有罪であると決定したのであります。國民に諮るの必要は無いと決定したのであります。國王を死刑に處すべしと決定したのであります。其の國王を死刑に處すると云ふ投票、其の投票は實に佛蘭西國民の勤王心の何の位の程度にあるかと云ふ事を試驗する所の投票である。盤根錯節には過ずんば何を以つて利器を別たんと云ふ事がありますが、其の點から云ふと此の投票は實に勤王心を試驗する所の大いなる機會であつたのであります。此の投票の結果總數七百二十一票の中で二十六票の多數を以つて國王を死刑にしろと云ふ事に決定したのであります。我が國民であつたならば斯くの如き事は夢想する事も出來ないのであります。此の點が即ち根本の違つて居る所以であります。勿論此の多數の內には暴徒から迫害を受けて國王を死刑に處すべしと投票しなければ殺すぞと强迫せられた者もありませう。殺すと云はれたつて構はないではありませぬか。和氣の清麻公は何うでありましたか。惡僧道鏡の爲に既に殺されやうとしたではありませぬか。殺されたつて構はない。我が君國の爲には一身を犧牲にすると云ふのが日本國民の特徵である。佛蘭西國民はさうではない。君國よりも一身の方が大事なのである。君國の存亡よりも自分が殺される方が恐いのである。そこで斯樣な亂暴も敢へてするのである。

私は茲迄述べて來て、我が國民と外國民とは根本の思想に於いて違つて居ると云ふ事は十分申し明したと思ふのであります。けれどももう少し此の事に就いて述べて見たい。彼の支那の賢人と云はれて居る孟子は何う云ふ事を云つたか、臣として君を伐つ忠と云ふべきかと云ふ問に對して、仁を賊ふ者之れを賊と云ふのである。義を賊ふ者之れを殘と云ふのである。殘賊の人之れを一夫と云ふのである。一夫の紂を誅することを聞いて居るが、未だ君を弑したのを聞かないのである。斯う云ふ答をして居る。克くも斯う云ふ詭辯を弄する事か出來たものである。晉の桓溫は男子芳を百世に流す能はずんば亦當に臭を萬年に遺すべしと云つた。臭は臭名である、惡名である。斯くの如き言葉は決して我が國民の口に出來ぬ所であります。又、してはならない所であります。之れを西洋に就いて見ますると云ふと昔羅馬にバヂリウスと云ふ人があつた。此の人は賊に質朴な基督教信者であつたが、其の人が或る時當時の羅馬皇帝バレンチヤヌス陛下から使者を受けて、其の皇帝の使者の前に立つことゝなつた。そして皇帝の使者がバヂリウスに云ふには、其の方は帝の信ぜらるゝ所の教理を信じなければ罰せられるぞと、斯う云つた。所がバヂリウスは之れに答へて、それはもう罰せられても仕方がございませぬ。が、併し何う云ふ罰を下さる。使者が云ふには其の罰と云ふのは御前の財産をすつかり沒收せられるのである。するとバヂリウスは一向平氣でそれは宜しうございます。私の財産と申した所が此の着て居る着物一枚限りでございますから、之れを取られた所で少しも差支はございません。使者は、御前そんな事を云ふと國外へ放逐されるぞ。いやそれも宜しうございます。一體神樣と云ふものは何れの所へ行つても御在でになるものですから、國外へでも何處へでも參りませう。使者もたまり兼ねて、御前そんな事を云ふと死刑に處せられるぞ。宜しうございます死刑にして戴きませう。私はうまれつき馬鹿でございまして、殉教者と云つて教の爲に身を犧牲にする丈けの知恵が

無いと云ふ事を常に悲んで居つたのでございます。それに此の病身でございまして何時迄永らへて居りました所で仕方がありませぬから、何うか早速死刑にして戴きたい。さうすれば殉教者の仲間入も出來るのでありますから是の位有難い事はございませぬ。是れがパヂリウスの云つた言葉でございます。而かも此の事は西洋では立派な事だとして傳へられて居るのでございます。何うです日本民族に於いてさう云ふ事が云へませうか。

それからして又私はもつと甚だしい例を擧げて見やうと思ふ。それは宗教界の大立者であり基督教徒に於いては神樣の樣に崇敬されて居る所のルーテル、宗教改革家のルーテルであります。彼のルーテルは宗教改革を始めまするより以前に羅馬へ行つた事がある。羅馬へ行つて羅馬の大會堂に參詣した。其の時に彼れは何う云つたか。あゝ吾れは何うも不幸である。未だ己の御父さん御母さんが生きて在らつしやるが實に殘念だ。

死んで居つて呉れゝば宜かつたと云つて悲しんだ。之れを聞いた人は吃驚して一體それは何う云ふ譯かと尋ねると。ルーテルの云ふには、イヤ此の大會堂に詣つて祈禱をすると云ふと兩親が死んで地獄に入つて居るのを救ふ事が出來るのである。今兩親が死んで居つて呉れゝば其れを救ふ事が出來たのに殘念であると云つて悲しんだ。先づ第一に兩親が地獄に居るものと考ふると云ふ事が大變な間違ひであると思ふ。が、是れは一歩讓るとして、父母が死んで居つて呉れゝば宜いと云ふ事を口にすると云ふ事は、實に驚き入つた事であると思ふ。併し乍らルーテルは親に孝行であると考へて斯う云つたのである。親に孝、君に忠、其の忠孝の言葉の中に含んで居る內容……形式に於いて假令同じであつても……其の內容、其の根柢に於いて東西甚しく異なつて居ると云ふのは此の點であると思ふのであります。詰り我が國に於きましては此の神道にさう云ふ風な經典とか御經とかバイブルとか云ふ物は無いのであります。さう云ふ典籍は無いので

ありますけれども、前から申述べました様に、家康公とか正成公とか道眞公とか、清麿公とか、或は又人麿公とか云ふ様な人々が示した所の一言一行、是れが悉く神道の典籍となつて居るのでございます。昔の學者は神道は天地を以つて書籍と爲し日月を以つて證明と爲す。と云ひましたが、その言葉の出所は暫らく置き實に立派な言葉である。是れが即ち神道である。我が固有の大道であるのであります。詰り事實即ち大道である。事實が大道を證明して居るのであります。平田篤胤翁は斯う云つて居る。一體誠の道と申すものは事實の上にちやんと備はつて居るのである。世の學者等は兎角敎の書でなければ道は得られぬ事のやうに心得て居りまするけれども、それは大變間違つて居る。事實がちやんとあるならば敎は必ずしも要らないのである。道の實事がないから敎は起るのである。是れは篤胤翁の說であるが實に其の通りであると思ひます。

さて、茲に私は神に上下があると云ふ事を申して置ました。一軒の家の

御上さんも神であれば、一國の君主も神樣である。それで東照宮とか、淺川神社とか、天滿宮とか云ふ樣な神樣は尊い神である。尊い神であるけれども、併し其の最も尊いのは天祖天照大神を初として此の御歷代の皇統の方々の神樣であります。それで此の天祖天照大神を初として御歷代の神々の示されたものが即ち神道のプリンシパルパートになつて居る。其の要部となつて居るのである。然らば其の一斑は何う云ふものであるかと云ふと、天照大神が皇孫を此の國に降さる時に三種の神器を下さつて、其の時に天壤無窮の神勅を授けられたのであるが、是れが神道の根本となつて居る。それから後に崇神天皇が即位の四年に、惟れ我が皇祖諸〻の天皇だち宸極に光臨せられたのは豈に一身の爲で在うか、さうではない。蓋し人神を司收し天下を經綸せられん爲である。故に能く世〻玄功を闡め時に至德を流かれたのである。今朕大道を奉承して萬民を愛育し、如何にしてか皇祖の跡に遵ひ、永く無窮の祚を保たん。其れ群卿百僚爾の忠貞を竭して並

に天下を安せん。亦可いではないかと云ふ御詔勅を下された。次の代の垂仁天皇も先帝を御稱賛遊ばして克く神祇を崇奉されて仁政を布かれた、茲を以つて人民富み榮え天下太平であつた。けれども今朕の世に當つて神祇を祭祀することに懈る事が在ては濟まないと云ふ事を詔勅の中に宣はせられたのである。又文武天皇は、あきらけきよきなほきまことの心を以ていやすゝみにすゝみてたゆみおこたる事なくつとめしまりてつかへまつれ、と云ふ事を百僚有司に對して勅せられたのである。斯う云ふ事は御歴代に擧げ來つて實に遥の無い程澤山あるのでございます。斯う云ふ所が即ち神道の要部を示されたものになるのであります。

五十二　神道の要旨

が、併し今日に於きましては文明が非常に發達し、運輸交通が大いに開けて來まして、東西の文明が甚しく混交して社會が復雜になつて來ました。

斯う云ふ社會に於きましては、今申した樣な事實が神道である。斯う云つて此の歴史的の事實や斷片的の言葉を擧げて是れが神道であると云つた所で、何うも國民に誤解の無い樣にする事は極めて困難であるのです。斯う云ふ談片的の事實や言語を以つて是れが神道であると、斯う云ふ風に考へて居つたならば、多數の國民の中には日に日々に誤解不信の渦中に陷つて來る者が多くなるのであります。畏れ多くも今上陛下は深く此の事を御軫念遊ばして教育勅語を賜はつたのであります。此の勅語に於いて神道の要旨を示されたのでございます。併し斯う申しまするとと云ふと、儒教を信じまする人は教育勅語は神道の要旨を示されたものであると云ふけれども、それは大いなる誤解である。是れは儒教の要旨を示されたものである。斯う云ふでありませう。それも尤もであるのです。又或る人は、いやさうではない、佛教の意味を說かれたのである。いやさうぢやない、基督教の教を說かれたものだと。各々自分の信じて居る方面に引いて解釋を

下すのであります。併し斯う云ふ風に教育勅語を以つて或は儒教の要旨であるとか、佛教の意味であるとか、或は基督教の教を説かれたのであるとか、斯う云ふ樣に勝手な事を云ふのは、我が帝國憲法は、是れは西洋の憲法の翻譯であると云ふのと同じであるのでありませう。一體我が帝國憲法が西洋の憲法の翻譯物である、同一物であると斯う申すのは日本人も西洋人も鼻は一つだ、眼は二つ着いて居る。所が鼻は縱に着いて居る、眼は矢張り横に着いて居る、不思議に日本人も西洋人も同じ事である。斯う云ふ議論と同じ事だと思ふのでございます。勿論西洋人も日本人も鼻は縱に着いて居る。鼻の横に着いて居る者は見えない。又眼の縱に着いて居る者は無い。眼と鼻と比較したら西洋人ばかりではない、支那人も日本人と同一であると云へませう。けれども斯くの如く日本人と支那人は同一である。日本人と西洋人と同一でありましたならば、最近の二大戰役即ち我が日本と清國、我が日本と露國との戰爭に於いて、人口の多い、面積の廣い、國の富んだ、兵器の極めて優れて居る、軍隊の數の多い、此の清國、此の露國が何故に人口の少ない、面積の狹い、兵隊の數の少ない、金力に乏しい此の日本に負けたのでありませうか。同じ鼻が縱に着き眼が横に着いて居るものならば、即ち同一人間であつたならば數學上の法則に從つて數字の多い方が勝たなければならぬ譯である。然るにさう行かないと云ふものは、即ち此の兵器或は軍人の數、或は人口、或は面積、さう云ふものゝ外にさう云ふ物とは比較する事の出來ない一種特別なものがあるからして斯う云ふ結果を生ずるのであると思ふ。即ち我が固有の大道と云ふものが我が國人の間に行はれて居るからして、詰り世界に並びのない所の大道が行はれて居るからして斯う云ふ結果を生ずるのである。如何なる強國と雖も是れに向つては辟易せざるを得ないのであります。教育勅語は此の大道を示されたものであると私は思ふのであります。詰り教育勅語に於いて説かれた意味は勿論儒教に於いても之れに似た所がありませう。父母に孝に兄弟に友に

夫婦相和しと云ふ事は儒教ばかりでなく佛教でも基督教でも申しませう。併し帝國憲法と外國憲法と同じであると云ふが、字は同じであるかも知れぬが精密なる眼を持つて居るもの、精密なる觀察眼を持つて居るものは日本帝國憲法と外國憲法とは一番重要な劈頭第一に於いて既に違つて居ることに氣が附くのである。即ち其の第一條には何と書いてあるか、「大日本帝國は萬世一系の天皇之れを統治す」と規定されてある。世界に國は澤山あるけれども、世界に澤山憲法は布いてあるけれども、其の澤山の國、澤山の憲法中何處の憲法と雖も斯くの如き事を規定して居る事がありませうか。最も重要なる第一條に於いて斯くの如きことを規定してある憲法は世界何れの國に就いても見ることは出來ないのである。是れが抑我が憲法と外國憲法と根本的に違つて居る所である。それと同じ樣に教育勅語に於いても其の言葉には多少似た所があるかも知れないが、其の精神の根本に於いては大變に違つて居る。世の近眼者流は此の根本の精神を見拔く事が出來ない。若し精密なる眼を以つて見たならば教育勅語に於いても必ず其の根本の異つて居る事を見拔く事が出來るであらうと思ふ。此の根本が即ち我が帝國の大道であるのであります。

彼の神社の前に行つて手を拍いたり、祝詞を唱へたりするのは、此の我が帝國の大道が胸中一杯になつて、其の溢れた一部分が手を拍いたり祝詞を唱へたりする事になるのであります。唯手を拍いたり祝詞を讀む事が神道であると云ふならばそれは大變な誤解であるのでございます。夫れ故に我が國民は此の教育勅語に示された所の根本の精神を體認して之れを實際に行つて參りましたならば、外の道は何も要らないのであります。外に信ずる所は要らないのであります。我が天皇陛下は此の我が國の思想界の混亂して居るのを大變に御心配なさつて此の教育勅語を降し賜はつて我が帝國の大道の根柢を示されたのであります。

五十三　教育勅語

斯く申しますると又或る論者は斯う申しませう。君の云ふのは少し遊ふ。君は教育勅語を以つて神道の根本を示されたものだ。我が國固有の大道を示されたものだと、斯う云ふけれども、教育勅語は神道勅語ではない。教育勅語ではないか。それは君の曲解であると斯う申しませう。是れに對しては私は辯ずる所がある。少なくとも三點の辯ずる所があるのです。

で、其の第一に於きましては、我が國に於いては昔から始終其の當時々々の天皇陛下があらゆる神として即ち神樣として尊崇せられて居るのである。吾々は神樣であると尊敬して居るのであります。吾が國民は皆然りである。教育勅語は其の神樣の御教である。神樣の御言葉である以上は、其の示されてある所の道は神の道でありませう。第二には、勅語には斯道は皇祖皇宗の遺訓と申されてあります。皇祖皇宗と申すのは何う云ふ御方であるか。即ち是れは天照大神を初として御歴代の天皇方である。而して御歴代の天皇方は吾々の謂ふ所の神である。吾々は皆之れを神と祀つて居るのであります。故に皇祖皇宗の遺訓は即ち神の御訓である。即ち神の道である。即ち皇祖皇宗の遺訓と申されたのは神の道と云ふのと同義異語である。故に神の道と云ふのに決して差支はないのであります。それから第三に教育と云ふものに就いて見ます。教育と申しますものは、或る特殊の人間に施す所のものではないのでございます。勿論今日教育と云ふものを工業教育とか商業教育とか農業教育とか色々な部に別けて居りますけれども、是れは學術の上の區別である。教育其の物の區別ではないのであります。でありますからして勅語を下さるに就いても、工業教育勅語、商業教育勅語、農業教育勅語と云ふ樣に斯樣な澤山な勅語を下さる必要は無いのであります。何故かと申すと、物を教へる場合には農業も教へませう、商業も教へませう、工業も教へませう、其の智識技藝を授くるに

當りては大いに異つた點がありませう。けれども教育其の物に至つてはそんな區別はないのである。教育は人を人とし、國民を國民として施すべきものである。決して農業教育、商業教育、工業教育と云ふ樣な特別な教育は無い。教授に於いて區別があるけれども、教育其の物に區別は無いのであります。夫れ故に教育勅語には、苟くも我が國民である以上は農業家でも工業家でも商業家でも、或は又政治家でも、法律家でも學者でも總べて皆必ず斯の道に依つて行かなくてはならないと云ふ事を示されたのである。是れが抑教育勅語の御精神であるのです。

所が我が國に於いては我が國民の祖先は神である。さうして吾々は神の遺體を有つて居るのである。獨り身體のみならず精神も神の精神の分靈である。一部分である。即ち吾々は吾が身其の儘の神である。少なくともくにつ神と云ふ言葉のある以上は吾々は神と云ふ事が出來るのである。其のくにつ神なる吾々國民……神の遺體を有つて居る吾々國民の行ふべき道は即ち神の道である。私は此の點から見ても矢張り教育勅語は神の道を示されたものであると、斯う云ふのであります。故に神の道は唯神社の前で手を拍き祝詞を唱へる丈けではない、是れも其の道の一部分を示すものであると云ふのである。最も重要なる所の一部分を示すのであると云ふのである。ではあるが全體としての神の道は我が帝國の國民たる者の悉く行はなければならぬものである。つまり世間では神の道を以つてむつかしい祝詞を讀んだりなんどする一種特別の道であるかと考ふる人が御座いますが前々から申します通り一部分を以つて全體とするので大變な誤解であるのであります。で、荷田春滿……已に述べましたる所の荷田春滿翁も「世の中に神の道とて道あらば、人の外なる人や學ばむ」と詠まれたのであります。世の中に眞正なる人の道があつたならばそれは神の道である。此の神の道の外に人の行ふべき道はあるものではない。神の道は即ち人の道で、人の道は即ち神の道。即ち斯道は人の行ふべき嵩高なも

のであると云ふ意味で、殊に此の荷田春滿翁の歌は最も克く神道の本意を明らかにして居るものである。斯う云ふ次第で私は敎育勅語は我が國民の悉く行はなければならぬ道である。即ち是れが神の道である。我が帝國固有の大道である。と斯う云ふ風に結論したいのであります。

五十四　我が國民の天職

以上述べて來ました樣な工合で、敎育勅語は即ち神道の要旨を示されたものである。即ち皇祖皇宗の遺訓を以つて我が國民の守らなければならぬ所の道を示されたものである。決して敎育勅語に於いては支那の孔子の遺訓を守れとか、又是れは孔子の遺訓であるとは敎へられてない。釋迦の遺訓であるとは敎へられてない。基督の遺訓であるとは敎へられて無いのである。勿論吾々が孔子の遺訓、釋迦の遺訓を奉じた所で憲法第二十八條に信敎の自由を許されてありますからして、決して我が法律には觸れないのであります。けれども我が憲法が之れを許して居るからと云ふて、陛下の聖旨に背いて外のものに無中になつて、それで差支へないでありませうか。それで我が國民の責務が濟みませうか。斯う云ふ風な寬大な憲法を我が國民に與へられた陛下の聖旨に對して差支へないでありませうか。此の點は深く考を要すべきであると思ひます。一體吾が國民には斯くの如く立派な帝國の大道が行はれて居るのであります。吾が固有の大道が吾々の祖先からして今日に傳はつて來て居るのであります。然るに外國から新に傳はつて來た所の敎に無中になると云ふのは、丁度之です。

れを例へて見まするとは小さい小供が……小さい二つか三つ位の赤兒に着物を着せやうと云ふ時に、今斜子の黑紋附或は縮緬の黑紋附を着せやうとする。所が其の側に唐縮緬の派手な着物があると、小供は其の立派な黑紋附を棄てゝ派手な唐縮緬を着ると云ふて、何うしても肯かない。無智なる孩提の兒、三歲の童兒、何も知らない、物の道理を辨ずる事の出來ない三歲の童

兒が斜子の黒紋附を棄てゝ唐縮緬の華やかなるを取るのは止むを得ぬ。止むを得ぬけれども堂々たる有髯の男子。堂々たる大丈夫が、少なくとも事理を解し得る所の人々が、斜子の黒紋附が其處にあるに、それを棄てゝ唐縮緬の着物を喜んで着ると云ふのは實に憐れな話ではありませぬか。先に述べました村田春海等は此の一流であると思ふ。西洋文明の潮流は斯う云ふ人物を益々多く作ると思ふ。實に慨嘆に堪えないのであります。

本章も大分長くなつて來ましたが、以上を約めて申しますると私の主張は、我が帝國には立派な大道があるのである。大道は即ち神の道である。神道である。其の神道と云ふのは本居宣長翁が、皇國にて神の道と云へば神の始めたまひ行ひたまふ道と云ふ事にこそあれと云はれた通りで、此の神の道と云ふものは神々の行ひ示し給はつた所の其の道であるのです。其の要點は教育勅語に最も明らかに示されてあるのであります。で、吾々は華やかな唐縮緬の樣なそんな外の道に迷はないで、我が立派なる黒縮緬の樣な固有の大道を身體に着けなくてはならぬと思ふ。つまり華やかな唐縮緬の樣なものが幾らあつても其の方に眼を移さず、我が固有の大道を守つて、日々理想の實現に向つて一歩々々進んで行くべきである。是れが我が大日本帝國々民の天職である。義務である。吾々の本務である。斯う云ふのであります。で、若し人あつて此の大道を誤解して、唯是れは手を拍く道である、或はトひをする道であるなどゝ云ひ、或は日本の道は偏僻姑息なり、頑迷なる最も卑しむべき道であるなどゝ云ふ者があるならば、其の誤解が吾々の敵であると斯う云ふのであります。吾々日本國民の最も恐るべき敵は露國ではないのであります。米國ではないのであります。獨逸でもありませぬ。佛蘭西でもありませぬ。實に吾々日本國民の最も恐るべき敵は此の誤解不信の輩であります。即ち獅子身中の虫とは此の輩の事であります。若し我が國民にして益々我が大道を體認して此の皇々たる國光を八方に輝やかしたならば、露國も吾々の親友であります。米國

も吾々の親友であります。獨逸も吾々の親友になつて來ます。佛蘭西も吾々の親友になつて來ます。吾々は決して斯くの如き强國を恐るゝに足りない。恐るゝの必要は全くないのであります。唯獨り恐るべきものは今申した所の獅子身中の虫であります。獅子即ちライオンは最も强い動物である。獅子一度び吼ゆれば百獸の腦が裂けると云ふ事であります。其の位强い獅子でもお腹の中に入つて來た眞田虫或は蛔虫などの樣な譯もない虫には閉口する。さう云ふ虫の爲には病氣を惹起して殺されて仕舞ふ。あれ程の獅子見た樣な强い動物でも小さい虫の爲には殺されて仕舞ふのであります。我が國民は實に强き陸海軍を持つて居る。世界無敵とも云ふべき陸海軍を持つて居る。實に我が國民の元氣は他に當るべきものは無いのであります。けれども此の獅子身中の虫の爲には害を受けないとは限りませぬ。それで吾々は此の獅子身中の虫は何うしても撲滅しなければならぬ。が、併し我が國民は元氣が極めて旺んであるから、斯う云ふ虫が一匹や二匹出來たと云ふてそんなに騷ぐ必要はない。一匹や二匹は生かして置いても差支はない。けれども「韓非子」と云ふ書物の中には「千丈の堤も螻蟻の穴を以つて潰ゆ」と云ふ事を云つて居ります。斯う云ふ虫が一匹や二匹位居た所で差支無い樣なものでありませうけれども、それを許して置いたならば或は千丈の堤を潰やす憂があるかも知れない。吾々は斯う云ふ誤解不信の虫の殖へない內に速かに撲滅して我が帝國を泰山の安きに置かなければならぬ。是れが即ち我が國民の速かに行はなければならぬ義務である。本務である。即ち是れが我が國家に盡す所以の道であらうと思ひます。斯くの如くにして我が帝國の大道を天下に宣揚すると云ふのが即ち吾々國民の本務で、日本國民の天職であるのであります。

第九章　神道の本義

五十五　要約

以上私は色々の方面から述べて來ましたが、反復申しました所は、世間では神道といふものをいろ〳〵と云ふ。神道は宗教であるとか、神道は道德であるとか、神道は政治の道であるとかいふ風にいろ〳〵と解釋をしますが、併しそれは誤解である。神道の本來の性質としては神道といふものゝ中に宗教もあれば道德もあり政治の道も包含して居るものである。此の三つの大系統を益〻維持し發展する其の道がそこにもう一つある。其の道を名けて教育或は教化と申すので、其の教化系統或は教育系統といふ一の「システム」が這入つて、詰り神道の內容は四つになるのであるといふ事を申しましたのであります。どうも世間では神道といふものを誤解して居る。前々から申します通り神道といふものはどういふものであるか。神道とは何ぞや。斯う云ふ風の問題を出しますといふと多くの人々は隨分奇妙な答案を提出するのであります。が、併し是れは我が國民が神道を知らない。神道といふものゝ考を久しく棚の上に上げて置いて仕舞つて只外の方面にのみ考を向けて居つたから、自分が實際神道の道に適つたことをして居ながら、即ち日々神道を實行して居ながら、而もそれが神道であるといふ事に氣が付かないのであります。だからタマニ神道に就いて考へるものがあれば徒らに外の方を捜して居る。多くの人はマルキリ不注意にして其の事を考へないで過して居る。で、突然人から神道とは何ぞやといふ問題を提出せられると大いにマゴ付くやうになる。先年「歐人の見たる神道」と云ふ論文を書いて寄越した佛蘭西の伯爵ダルヴィエラ、あの人の論文中にも斯ういふ風なことが書いてある。余は歐洲に於いて日本の留學生、學者若くは外交家、さういふ人々に會見する機會を得た毎に談必ず神道に及びたれども、毎々冷淡無頓着若くは風を捉へ雲を掴むやうな答にの

み接し、未だ曾て一向も明瞭なる答に接したことはない。斯ういふ事をメルウィエルラ伯が書いて居らるゝが其の通りであらうと思ひます。從來さういふ傾があるのであります。神道といふものに就いて一體に無智である。實際自分が實行して居ながら無智である。それでは一體神道といふのはどういふものかと云ひまするに、已に「神道の意義の章」に於いて述べました如く伊勢の外宮の神主度會延佳氏が言つて居られる通り、上御一人より下萬人に至まで旦暮に行ふべき道である。朝から晩まで晩から朝まで、上御一人より下萬民に至るまで日本國民が行はねばならぬ道が神道である。斯ういふ風に言つて居るが誠に其の通りである。尙度會延佳氏は天神地神より相傳の道に從つて行へば日用の間神道でないものは一つもない、一擧手一投足悉く神道である。特に指示して是れは神道なりと一々指南に及ぶべき道ではない。斯ういふ風にも云はれて居る。それを我が國民は誤解して居る。さういふ風に我が國民の一擧手一投足必ず之れを履まねばならぬ、之れを行はねばならぬ、最も大きな道である。斯道を外れる事は出來ない。斯道を外れれば、此の日本に居ることは出來ない。此の日本に生存することは出來ない。神道は斯う云ふ道である。それを全く誤解して自分が始終行つて居りながら神道とは何ぞやと言はれるとマゴ付いて仕舞ふ。が、併しそれも無理の無いことである。何故かと申しますと、佛教や基督教になつて來ますと、或は釋迦と云ひ、或は基督といふ教祖があつて、其の人が長い間いろ〳〵と教を說いて居る。それが皆經典となり聖書となつて殘つて居る。其の經典、其の聖書といふものを見ればチャンと其の道といふものが明に分るが斯の神道にはさういふやうな聖書といふものがない。さういふやうな經典といふものが無い。が、併しさういふものがないから道がない。さういふものがないから道が分らぬといふのは、非常な短見なものであります。で、私はさう云ふものがなくても、道は嚴として存することを述べて見ませう。その嚴として存する道といふものはどう

いふものであるかと申しますと、詰り國民的精神或は日本魂とも申しませうか、さういふ風なものゝ偉大なものを備へて居られましたる、古代からしてズット今日に至るまでの神聖、即ち神々の行はれたる事跡が直ぐに我が國民の旦暮に行ふべき道になつて居るのであります。我々は其の道を標準として四六時中行つて居るのであります。平田翁の言はれたる通り一體眞の道と申すものは事實の上に備はりあるものにて、事實の上に備つて居るのが眞の道、之れが神道である。神道には聖書や經典などは要らないのである。チヤンと事實に現はれて居る。其の事實を行つてさへ行けばよいのである。即ち古來の神聖、日本國民的精神の精髄を備へられて居る所の神聖が行はれた道を行つてさへ行けば宜いのである。してその神聖の最も大いなるものは天照大神である。それから後ズット皇統歴代の神々、それから前章に申したる通り和氣清麿公、或は楠正成公、さう云ふやうな人々が國民的精神の最も偉大なるものである。コー云ふ神々の行はれたること實が即ち我々の行ふべき標準になり、我々の行ふべき道になつて居る。アヽ云ふ大國民的精神を備へた方が行はれた通りに我々が行へば宜い。決して楠正成公の事跡を行ふ所のものは敵の前に臨んで後ろに逃げて來るといふやうなことは出來ない。正成公の行はれた事を我々が標準として行ふときには決してさう云ふ卑怯未練なことは出來ない筈である。之れが神道である。斯ういふことが皆神道だ。併しそれがどうも外の道のやうに聖書や或は經典といふものがないのでありますからチヨツと考が其處に及びにくひ。考が付きにくい。付きにくいからして時に依ると誤解を生ずるやうになつて來る。アノ佛教が傳來して來ました時に神道を守らなくてはならぬといふことは大抵氣が付いて居る。けれども神道といふものはどういふものであるかといふことを實際に徹底して知つて居らないから非常な誤解を生じて來て、終には蘇我氏みたやうな大罪を犯すやうなことが出來て來た。之れが詰り神道を十分に了解して居らない

からである。そこで以つてアノ大事件があつた時に、朝廷は國民をして十分神道の神道たる所以を理解せしめんと努力されて居る。彼の推古天皇の時に方りまして今朕の世に當つて神祇を祭祀する豈に怠るあらんや。故に群臣爲に力を竭し宜しく神祇を拜すべしといふことが勅せられてあります。其の當時國民が敬神尊王といふことに大分うとくなつて來た。即ち佛教の方に傾いて佛崇拜に熱心になつて來て、固有の神道をどうやら疎かにするやうな傾がある。故に朝廷に於いてはさういふことをしてはイカぬ。朕が世になつてさういふことがあつてはならぬと斯う仰せられたのである。それから又孝德天皇の朝に於かれては蘇我石川麿は奏して先づ神祇を祭鎭め然る後政治を議さなくてはならぬと申しました。之れと云ふも當時の社會が動もすれば固有の神道に背馳する傾があつてどうしても此の儘打遣つて置けないといふので發せられた言であらうと思はれます。それから又當時の天皇は詔を發して公卿百官淸白(アキラカキコヽロ)意を以つて神祇を敬ひ祭り並に休祥を受け天下を榮えしめよと宣つて居る。淸白意を以つて神々に仕へよ。之れが即ち神道を皷吹せられた一大聲明で、其の當時神道を誤解する者が出來たに對してそれを敎導せられたものと察せられるのであります。斯ういふやうに朝廷に於いて常に國民を指導されて居る。何か外から事件が起つて來た時に國民が神道を忘れるやうな狀態に陷るといふと朝廷からいろ〳〵の詔勅などを發せられて其の方へ行つてはならぬ。コツチに固有の大きな道があるからして之れを守つて行かねばならぬ。斯ういふ風に示されて居るのであります。斯う云ふ風にされて來ましたので此の國家は益〻强大となり、國民は益〻發展して來て居るのです。

五十六　一世の誤解

所が維新以來非常に西洋の文明が這入つて來ました。恰も河を決する

が如き勢を以つて西洋の文明が這入つて來ました。で、維新の當時朝廷に於かれてはどうかと申しますと。天皇は南殿に出御せられて五ヶ條の御誓文を宣せられた。其の五ヶ條の御誓文中第四條には舊來の陋習を破り天地の公道に基くべしと、斯う宣はせられて居る。第五條には知識を世界に求め大に皇基を振起すべしと、斯う宣はせられて居る。所がどうも之れを誤解した。第四條の舊來の陋習を破り之れは誠に結構な事である。從來幕府の政策鎖國的の政策の結果として國民が非常に保守的になり退嬰的になり因循姑息的になつて居る。此の陋習を破り天地の公道に基いて行ふべきを示されて居る。斯ういふ譯である。又、知識を世界に求めるとうしても今日は世界最新の知識を持つて居らなくてはならぬ。知識はどうしても古くては駄目である。それゆゑに知識を世界に求め大に日本の皇基を振起しなくてはならぬ。斯ういふ仰せなんです。實に和魂漢才の趣旨を示されて居る仰せである。それを維新以來一般世人が誤解して仕

舞つて皆上の方の舊來の陋習を破ることだけを考へて後の方は疎きにして仕舞つた。又知識を世界に求めといふ方ばかりを主として何でもかでも西洋の文明を學んだ。即ち西洋心醉といふ狀態を呈して來たのである。それで舊來の陋習を破るのであるから昔の風は何でもイカぬ。斯ういふ風になつて來ましたから政治も昔の政治ではイカぬ。之れから民主政にしなくてはならぬなどゝ飛んでもないことを言出して主權は何れにあるか。つまり國民にあるのであると云ふやうな事を云ひ出して來た。それから又人間には天賦人權と云ふものがある。外から侵すことの出來ぬ天賦人權と云ふものがあると云ひ出した。天賦人權は宜いですけれどもそれを矢鱈に振廻して生半可の自由呼はりをし、何でもかでも自由ぢやなんと云つて却つて安寧秩序を害し、往々にして甚だ不自由な結果を生ずるやうなことをして居る。政治の方もさういふ工合であるが、更に宗教の方面を見ると基督教は文明國民の奉ずる文明教だから今日文明國民と交通す

るには文明教を奉せねばならぬ。そんなことを盛に言出して來た。ナンでもカンでも基督教でなくてはならぬ。又基督教を信ずるものは偶像を崇拜する事は出來ない。寫眞に向つて御辭儀は出來ないといふやうな不都合な奴輩を出す樣になつて來た。是れは御誓文の上の方ばかり採つて來た弊害である。それから又道德の方面はどうかといふと、道德は快樂主義に限る。人生快樂是れに越したことはないなんと云つて、快樂主義とか、幸福主義とかいふ方面ばかり主として實に大變な事になつて來た。所謂風俗頽敗道義地を拂うて、紳士も墮落し、青年も墮落し、社會も墮落し、ドーも不都合の狀態を呈して來た。それがどういふ譯かといふと、詰り此の五ヶ條の御誓文に舊來の陋習を破り天地の公道に基くべしと云ふことを考へて居らぬ。天地の公道といふのは古今に通じて謬らない、中外に施して悖らない大道でなくてはならぬ。是れ以上の天地の公道はない。是れ以上の天地の公道はないのだ。けれどもそこに氣が付かないで徒らに外國の方に眼を走せて居るからさういふ狀態を呈して來る。大に皇基を振起すべし、即ち知識を世界に求むるのは此の皇基を振起するのが目的である。徒らに外國の知識を求むるばかりでない。知識ばかり求めても何もならぬ。乾燥無味な人世ではない。そんな知識ばかりで人間は生活が出來るものではない。其の知識を求むる所以のものは更に其の奥に大に皇基を振起して國民の眞生活を味はなくてはならないからである。其の事は忘れて仕舞つて居る。肝腎なことを忘れて居る。さういふ譯で一にも西洋、二にも西洋。政治でござれ、宗教でござれ、道德でござれ、悉く西洋主義でなければならぬと云ふ事になつて來た。西洋の文明に心醉してそれを殆んど丸呑にした結果として實に日本國民は非常な混亂な狀態を呈して來た。學者であらうが、政治家であらうが、實に名狀すべからざる狀態になつて來た。即ち今申した風俗頽敗道義地を拂うて、墮落に墮ぬるに墮落を以つて、しかの百鬼蠢行といふ有樣を現出した。斯ういふ狀態を現出したので其

の結果として最も神聖なる教育に從事する者でも、矢張り其の風潮に促されて來た。將來の日本國民を作る教育家が徒に輕兆浮薄に流れ西洋心酔主義ともいふべきものを以つて教育に從事するやうになつて來た。其の結果たるや實に智者を待たずして明かなる狀態になつて來た。さう云ふ有樣で實に當時の日本の社會の狀態は甚だ寒心すべき現象を呈して來た。それをば九重の上より御覽遊ばして、今上陛下は大いに宸襟を惱まされて斯ういふ風な教育を施して居つたならば、將來の國民はどうなるだらうか。斯ういふ事を大いに御軫念遊ばして、それで今より二十年前即ち明治二十三年の十月三十日に彼の教育勅語を御發布になつた次第である。彼の教育勅語が一たび出て今まで百鬼畫行の此の社會の混亂は一大燈明臺を得たのである。今まで混亂して居つた教育界は茲に一大指南車を得たのである。即ち此の教育に關する勅語は燈明臺となり指南車となて教育界を指導して行くやうになつて來たのであります。

五十七　教育勅語の斯道

それで私は是れから暫く私が此の教育に關する勅語を拜讀して得ましたる愚見を聊か述べて見ませうと思ひます。是れは前章にも大分詳しく申して置きましたが、最も肝要なる點でありますから、本章にも更に語を變へて述べますのです。此の教育勅語に示されて居りまする道は皇祖皇宗の遺訓と仰せになつて居る。其の皇祖皇宗と申されたる御方は即ち天照大神を始め歷代の神々を申すのである。ですから斯道は皇祖皇宗の遺訓と仰せられたる皇祖皇宗は即ち神々である。だから教育勅語の中に書いてありますことは皇祖皇宗の遺訓で即ち之れが神の道であります。之れが神の道を示してあるのであります。前節に申しました通り明治の初年より漸次廿一二年頃に亘りまして社會の狀態が不幸な有樣を呈して來まして過度時代、混亂時代、墮落時代とも申すべき時代を現出しました。而し

て佛教傳來の當時に於いては尙神道の影響は强大であつたからしてアーこ云ふ簡短な勅語にても國民をして指導されるのに足りて居つたのであります。併し維新後の西洋文明の侵入といふものは佛教傳來の比ではない。非常な勢力である。でありますからアノ當時のやうな簡單な勅語を以つては到底十分でないといふことは明かであるのであります。そこで此の教育勅語に於いては從來の皇祖皇宗の遺訓を一々に文字に書き現はされて我が國民が從來行つて來たのは斯ういふ風な道である。斯道である。斯道は皇祖皇宗の遺訓であつて我々國民が十分遵由して來た道である。だから未來も長く斯道を遵由しなくてはならぬ。斯ういふ譯で此の教育勅語を御示しになつたのである。であるから私は教育勅語の中に御示しになつて居ることは即ち斯の神の道即ち神道を示されたのである、と斯う常に解釋し奉るのであります。

そこで私は此の教育に關する勅語の中に御示しになつて居ります所の

神道を分つて之れを三つとすることが出來ると思ひます。其の三つはどういふものかといふと、第一は自己に對する道即ち自分に對する道である。吾れに對する道である。其の次は社會に對する道。其の次は國家に對する道。此の三つの道が教育勅語の中に示されてあるのであります。

吾れに對する道即ち己れの行ふべき道といふのはどういふ道であるかといふと、第一が恭にして倨傲驕慢なことの無いのである。一體人間は傲慢ではイケない。東郷大將が傲慢であつたならば東郷大將の價値の大半を失はるゝであらうと思ひます。だから恭。それから儉。儉といふのはどうかといふと奢侈放逸でないのである。此の恭儉といふことが己れに對する道の第一になつて居る。其の次には學を修むるので、いろ〳〵な學術を研究する事。それから又いろ〳〵な業務を習ひ實務に就く。かやうに自己を恭儉にするのと、學を修むるのと、いろ〳〵な業務を習つて實務を練習し實務に忠實に就くのと此の三つが己れに對する道である。此の己